

## チベット訳『梵天所問経』-和訳と訳注(2)

五島清隆

### 1 はじめに

本稿は、五島 [2009] の続編である。校合に用いた写本大蔵経 (B: パタン, K: 河口慧海将来本, L: ロンドン・シェルカル, Ph: プタク, T: トク・パレス) と版本大蔵経 (C: チョーネ, D: デルゲ, H: ラサ, N: ナルトン, P: 北京) の詳細に関しては、五島 [2003][2009] を参照願いたい。<sup>(1)</sup>

『梵天所問経』と本経を引用する文献や本経と他経典との関係については、五島 [1989] に詳しいが、重要な点を確認しておきたい。

まず、本経を引用する文献は数多いが、それらを著者別に見てみると、伝・龍樹作 (『大智度論』『スートラサムツチャヤ』)、無著 (『摂大乘論』『順中論』)、世親 (『大乘莊嚴経論』)、清弁 (『般若灯論』『大乘掌珍論』)、月称 (『プラサンナパダー』)、ジナプトラ (『瑜伽師地論釈』)、カマラシーラ (『修習次第・後篇』)、ディーパンカラシュリージュニャーナ (『マハースートラサムツチャヤ』)<sup>(2)</sup> である。注目すべきは、いわゆる中観派の学匠ばかりでなく、瑜伽行唯識派の無著・世親が本経を重視している点である。特に世親には本経の注釈書がある (天親菩薩造『勝思惟梵天所問経論』4巻、菩提流支訳、本経の菩提流支訳全6巻の前2巻に相当する部分についての注釈)。

次に他経典との関係であるが、「空・不二」「不得生死不得涅槃」「一切法究竟清浄」を強調する点で、『迦葉品』や『維摩経』と思想的に密接な関係があることが認められる。しかし、それよりも重要なのは、思想的には殆ど無縁と思われる『法華経』との関係であろう。前掲の五島 [1989] では「本経は、『迦葉品』成立以後に、『維摩経』とほぼ同時あるいは少し後れて、『法華経』の最終的な形態が確立する以前に編纂されたと考えられる」と記しておいたが、本経 (BP) が『法華

---

(1) このほか、本稿で用いる符号や記号、諸形式などについても前稿のそれらに準じている。五島 [2009] 142-143 頁参照。

(2) 望月 [2002] によれば、tshangs pas zhus pa'i mdo (\*brahmapariṣcchāsūtra) として5回 (6.1, 10.3, 22.10, 23.1, 37.5) 引用されている。

経』(SP)に先行し、しかもSPに少なからぬ影響を与えているとすれば、SPの成立史、思想史を論ずる上できわめて重要だと思われる。この点に関して筆者は、別稿を準備しているが、その要点のいくつかを以下に挙げておこう。

1. BPの「五百比丘起去」とSPの「五千比丘起去」の関係。
2. BP, SPにみられる「四人の地涌の菩薩」のエピソード。
3. BPの「如来の五力」とくに「意図に基づくことば」「方便」「如来の大悲」と、SPの「意図に基づくことば」「如来の巧みな方便」「如来の知見」の関係。
4. BPの「三乗」思想とSPの「一乗」思想の関係。
5. BP, SPに見られる授記の内容。

1に関しては、すでに五島[1986]で詳細に論じている。「提婆達多の破僧」伝承に端を発したと思われる「増上慢の比丘の会座からの退出」のエピソードは初期の大乗仏典に多く見られる。それぞれの構成を比較してみると、BPとSP以外は、退出した比丘たちを何らかのかたちで連れ戻そうという努力がなされるが、BPでは「虚空から逃れられないように、空(空の教え)から逃れることは出来ない」としていわば放置する。しかし、比丘たちはこのことばを聞いて自ら戻ってくる。これに対してSPでは、退出した比丘たちを仏陀は「無価値の粗殻が除かれた」としてその退出をむしろ喜び、「一乗真実」の究極的な教えを説いていくのだが、経は退出した彼らについては全く言及しない。これは、「どんな増上慢の比丘も結局は一仏乗の中にある」とする思想を前提としているからであろう。これはBPの戯曲的構成を踏まえたものと解釈すべきであろう。

2もいわばエピソードの類似例であるが、4人の見知らぬ菩薩が突如地下から出現する<sup>(3)</sup>という構成は他経には見られない。BPでは、網明(ジャーリニープラバ)菩薩が放った光に促されてただ単に4人の菩薩が出現するだけだが、SPでは4人を含む多くの菩薩の出現が極めて重要な意味を帯びており、次の「如来寿量品」を導き出す効果的な「演出」となっている。これも、SPの構成をBPが簡潔にして利用したというよりも、BPの発想をもとにSPがそのような演出を工夫したと見るべきではないだろうか。

3は本稿が扱うBPチベット訳第二巻の後半のテーマであり、これに関しては簡潔ながら五島[1989][1997]で既に論じている。また、SPに関しても既に五島[1978]で詳細に論じている。SPでは、「一乗(仏乗)」を「三乗(声聞・独覚・菩薩)」として人々に説き示したのが如来の「意図に基づくことば」・「如来の巧みな方便」であり、そのようにして真実の教えとして説かれた「三乗」が実は「深い意図」「巧みな方便」に基づいて説かれた仮の教えであり、真実は「一乗(一仏乗)」しか存在しないことを明らかにする。SPでは「三乗方便一乗真実」を明らかにするこの教説自体も「如来の知見」の発露たる「巧みな方便」とされるのである。これに対してBPでは「意図に基づくことば」は増上慢を除くために仏陀が説いた相互に矛盾する教説を指し、「方便」も如来の知の働きとしてよりは如来が菩薩に対して示した菩薩の修行道(あくまで「不可得」のものとしてだが)という観が強い。また、声聞・独覚(小乗)の悟りを追求する人々をなんとか仏知・大乘に向かわせようとするのが、BPが主張する「如来の大悲」に他ならない。さらに、BP

(3) BPでは下方の他仏国土から、SPではサハール世界の地下の虚空界から涌出する。

では、これらの「如来の五力」を菩薩自らが修習、行使することが求められている。この点は SP と大きく異なっている。

4・5 に関しても 3 と同様のことが言えるだろう。BP の場合、「大乘」「小乗」の語はあるものの、「一乗」「二乗」の語は見られず<sup>(4)</sup>、「三乗」の内容も「声聞・独覚・仏陀」であり、SP とは内容が異なる。そもそも、「三乗」を「一乗」に包摂するという発想は、「三乗各別説」が強く主張される思想的状況のもとで出て来るものではないだろうか。そういう点で、SP は BP よりも後の時代に属すると考えたい。「授記」に関しても、BP にも SP 程ではないが、比較的整備された段階の授記と仏国土が出て来る。しかし、この場合も、BP は声聞・独覚を排除しているので、やはり SP とはかなり異なると言えるだろう。<sup>(5)</sup>

以上のような BP と SP との類似点・相違点に関してはさらに詳細な比較・分析が不可欠だが、筆者としては、BP から SP への影響関係という観点から見ていくべきだと考えている。

今回の第二巻訳出に当たって、日本印度学仏教学会データベースセンターによる大正新脩大藏經テキストデータのオンライン検索を利用させていただいた。また、Gretil (Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages) によって公開されているサンスクリット仏教文献の電子情報を語句の検索に利用させていただいた。これらの電子情報を入力していただいた方、システムの創設、管理、維持に携わっておられる方がたに感謝の念を表するとともに、このような恩恵に浴して仏教文献の正確な読解・研究の一端に参加させていただく幸運にも厚く感謝致します。

## 2 和訳と訳注

第二巻 (bam po gnyis pa)

(IV-1)

その時、ブラフマー神であるヴィシューシャチンティンは、世尊にこう申し上げた。

「世尊よ、どのようにしたら、菩薩大士 (\*bodhisattva-mahāsattva) は、(1) 諸々の世俗のことがら (世間法\*lokadharmā)<sup>(6)</sup> を超越し、(2) 世間のならわし (世間法) の中においても諸々

<sup>(4)</sup> 「一乗」は法護訳に一度 (Ch1:一乗 (28c5), Ch2:同一相 (58b13), Ch3:一空味 (92b14), Tib:ro gcig (P96b6)), 羅什訳に一度 (Ch1:一味 (2a8), Ch2:一乘 (34b14), Ch3:一味 (63c13), Tib:ro gcig pa (P27a7)), 「二乗」は羅什訳・流支訳に一度 (Ch1:諸聲聞弟子之地一切縁覺 (3a5), Ch2:二乘 (35a23), Ch3:二乘 (64c3), Tib:dgra bcom bdag nyid chen po'i sa ... rang rgyal gyi (P29b1-2)), 流支訳に一度 (Ch1:聲聞縁覺 (8a5), Ch2:聲聞辟支佛 (40a13), Ch3:二乘 (70c3), Tib:(nyan thos dang rang sang rgyas (P43a5))), それぞれ見られるが、すべて意識であろう。五島 [1989]415 頁註 (31)。

<sup>(5)</sup> Cf. 田賀 [1974]180-186 頁。

<sup>(6)</sup> 「世間法 (lokadharmā)」とは「世俗のことがら、世間のならわし、世の常識」の意。また、「世間の真のあり方 (真相)」の意で、四聖諦の流転門 (苦諦・集諦) をも指す。複数形の「世間法 (世俗のことがら)」は主に「世間八法」(第 3 偈参照) を指している。Cf. VKN : 「出世間の身体をもつ如来がたは、あらゆる世俗のことがらを超越なさっておられる」 lokottarakāyās tathāgatāḥ sarvalokadharṃasamatikrāntāḥ. (ch.3 sec.45)

の世俗のことがら（世間法）に汚されることなく<sup>(7)</sup>，（3）世間のならわし（世間法）に従うこと（'jug pa, \*anuvṛtti<sup>(8)</sup>）を求めはするが，世間のならわし（世間法）に従うことには近づかず（mi mchi<sup>(9)</sup>），（4）世間のならわし（世間法）に従いながらも，人々を世間のならわし（世間法）から解放し，（5）世間のならわし（世間法）の平等性（\*samatā）を得て，世間の中で行動して諸々の世俗のことがら（世間法）を破壊することはしない，というようになりますか」

## (IV-2)

その時，世尊は，ブラフマー神であるヴィシエーシャチンティンに対して，[次のような] 詩頌によってお答えになられた。

- (1) <sup>(12)</sup>... 私は世間は〔五〕蘊であると説く。諸々の世間はこの〔五蘊の〕中に住する<sup>(10)</sup>。  
<sup>(11)</sup>... この中に住することがなければ，世間のしきたり・ことがら（世間法）から解脱する。...<sup>(11)</sup>...<sup>(12)</sup>

(7) 『スッタニパータ』に次のような詩頌がある。

世俗のことがらに触れてもその心が動揺せず，憂いなく，汚れを離れ，安穩であること，それがこの上なき幸せである。

phuṭṭassa lokadhammehi cittaṃ yassa na kampati /  
 asokaṃ virajaṃ khemaṃ etaṃ maṅgalaṃ uttamaṃ // (Sn 268)

(8) *Mvy* 2124: anuvṛttiḥ, 'jug pa. Cf. *Divy* : 「さて，彼の親戚の者たちは世間のならわしに従って軽蔑を前提として名付けをしようとした」 atha tasya jñātayo lokadharmānūvṛtyā avajñāpūrvakena nāmadheyam vyavasthāpayitum ārabdhāḥ. (105.14)

(9) *TSD*: mchi ba, upasaṃkramaṇa.

(10) Ch1: 於世無所著。

(11) Ch1: 以不貪著世 不捨世間法。Ch2: 依止於五陰 不脫世間法。

(12) [引用]

『般若灯論』 (*Prajñāpradīpa*)

[Tib]: de bzhin du ( *AVP* : 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las )

ngas ni 'jig rten phung po bstan // de la 'jig rten gnas par gyur //

mkhas pa de la mi gnas pa // 'jig rten chos kyis mi gos so // (A)

'jig rten nam mkha'i mtshan nyid de // nam mkha' la yang mtshan nyid med //

de'i phyir de'i de rtog pas // 'jig rten<sup>1</sup> chos kyis mi gos so // (B)

1) *Pra* : ten. (*Pra* Tsha 107b8-108a1 ; *AVP* Zha 68b7)

\*) 上記 B 偈は *BP* の本文第 11 偈の引用（註 23 参照）。*AVP* はこの B 偈を省略している。

A 偈 cd 句（「巧みな人は世間に住せず，世間のしきたりには汚されない」）は以下の漢訳とも *BP* のチベット訳・諸漢訳とも異なる。

[Ch]: 又如勝思惟梵天所問經偈曰。

我爲世間說諸陰 彼陰爲彼世間依

能於彼陰不作依 世間諸法得解脫 (A)

世間如彼虛空相 彼虛空相亦自無

- (2) 菩薩はこのことに巧みである。世間の自性 (\*svabhāva) を知って、〔五〕蘊と深い関係にあって (rab ldan, \*samprayukta<sup>(13)</sup>) も、世間的なあり方 (世間法) をもつことはない<sup>(14)</sup>。
- (3) 得, 失, 名誉, 不名誉, 称賛, 誹謗, 苦, 楽 [P38a] のこれら (世間八法) は世間を動揺させている<sup>(15)</sup>。
- (4) 偉大な智慧をもつ賢明な (brtan<sup>(16)</sup>) 彼らは、諸々の世俗のことがら (世間法) をよく理解しており、世間が壊れる〔性質をもっている〕のを見ても、それらに関して動揺することはない。
- (5) ものを手に入れても興奮することなく (mtho bar<sup>(17)</sup> mi sems), 失ってもがっかりすることはない (dmas pa<sup>(18)</sup> med)。スメール山の如く堅固であって、その様子 (rnam pa, \*ākāra) には何らの影響も見られない (kun tu gnod mi 'gyur<sup>(19)</sup>)。
- (6) 同様に、名誉, 不名誉にも常に平等 (mtshungs pa, \*samāna) である。苦, 楽, 称賛, 誹謗に対しても平等性 (\*samatā) に住する。
- (7) この世間は二つ〔の対立する想〕から生じる。転倒 (\*viparyāsa) から生起する。それゆえ、巧みなる人たちは、〔そのような〕世間のあり方 (世間道, \*lokagati) を理解して、〔世間〕道ならざるところ (\*agati) に行く<sup>(20)</sup>。
- (8) 彼らは、この世間がどういうあり方 (\*gati) をしているか、そのあり方を知っている。それゆえ、世間的あり方 (世間道, \*lokagati) に入って、人々 (skye bo, \*jagat) を苦から解放する。
- (9) 彼ら勇者 (\*vīra) たちは世間で行動しているが、蓮 (\*padma) のごとく執着はない。<sup>(21)</sup> 法界 (\*dharmadhātu) に住しつつ、諸々の世俗のものごと・ならわし (世間

由如是解無所依 世間八法不能染 (B) ( Taisho vol.30 70c11-16 )

(13) KP: samprayukta, rab tu ldan pa. (sec. 25)

(14) KLPhT: ldan ma yin. B: ldan pa yin. CDHNP: ldan pa yi.

(15) BCPh: bskyod. DKLT: skyod. HN: skyong. P: bskyong. Ch1: 馳世苦樂法. Ch2,3: 常牽於世間.

(16) KLT: brtan(\*dhīra). BCDHNPPH: brten.

(17) PT: mtho bar. KL: mthos par. CDHN: thos pa. B: thos par. Ph: ma thos par. Ch1: 得利不以悦. Ch2,3: 得利心不高.

(18) CBPhT: dmas pa. L: smras pa. DH: ngoms. KNP: ngams. Ch1: 棄捐亦不感. Ch2,3: 失利心不下. TCD: dmas pa, rgud pa'am nyams pa'i don, 衰退.

(19) Mvy 5359: samabhidrutaḥ, kun tu gnod par gyur pa. Cf. LV: 「傷ましいかな、老いによってむしばまれる若さよ」 dhig yauvanena jarayā samabhidrutena. (ch.14 v.11c)

(20) Tib: 'gro med 'gro (\*agatiṃ gacchati). Ch1: 不生於世間 明達獨遊歩. Ch2,3: 不行世間道. agatiṃ gacchati は、阿含等では、「(畜生などの) 非道 (agati) に行く」意だが、ここは「〔世間〕道ならざるところに行く」と取るべきであろう。Cf. Dbh 「[発心した菩薩は] すべての世間的なあり方を超越し、出世間的なあり方に住している」 sarvalokagatiḥyo 'vagrānto bhavati, lokottarāṃ gatiṃ sthito bhavati. (8.24-25).

(21) Cf. KP: 「たとえば、カーシャバよ、蓮は水中に生じて、水によって汚されることはない。それと同じように、

法)を破壊することはない。

- (10) 〔世間の人々が〕世間の中で行動しながら、世間の〔真の〕あり方(世間法)を知らないのに対して、巧みなる人は世間の〔真実の〕相(\*lakṣaṇa)を理解して、まさにそれら〔世間〕の中で行動する。
- (11) <sup>(23)</sup>…世間は、虚空の相を持つ。虚空には相はない。彼らはそういうあり方(\*gati)を理解して、世俗のことがら・ならわし(世間法)によって汚されることはない。<sup>(22)</sup>…<sup>(23)</sup>
- (12) 〔彼ら菩薩たちは〕自分が世間を理解した通りに人々(\*prāṇin)に説く。法の自性(\*dharmaśvabhāva)を理解して、諸々の世間を破壊することはない。
- (13) 〔五〕蘊には自性がない。これが世間の〔真の〕あり方(世間法)に他ならない。そのように理解しない人は、常に世間に住している。
- (14) <sup>(25)</sup>…五蘊は<sup>(24)</sup>…生起することなく発生することはない…<sup>(24)</sup>と理解する人々は、世間的行動(\*lokacaryā)を取っていても、この世間に住することはない。…<sup>(25)</sup>

カーシャパよ、菩薩は世間に生まれるけれども、世俗のありかた(世間法)に汚されることはない」 tadyathāpi nāma kāśyapa padmam udake jātam udakena na lipyate, evam eva kāśyapa bodhisatvo loke jāto lokadharme(hi) na lipyate. (sec.38)

<sup>(22)</sup> Cf. SR: 「賢者が安住している心の制御、身体の抑制というこの〔領域〕は、この世におけるすべての命あるものの領域ではない。そういう彼(賢者)は、虚空のように、世俗のことがら・ならわし(世間法)によって汚されることはない」 agocarō 'sāv iha sarvaprāṇinām yatra sthito yo vidu cittasaṃyame, yatra sthito gocari kāyaśaṃvare na lipyate kham iva sa lokadharmaiḥ. (ch.38 v.22).

<sup>(23)</sup> [引用]

『般若灯論』(Prajñāpradīpa)

[Tib]: de bzhin du ( AVP : 'phags pa tshangs pa khyad par sems kyis zhus pa'i mdo las )

ngas ni 'jig rten phung po bstan // de la 'jig rten gnas par gyur //

mkhas pa de la mi gnas pa // 'jig rten chos kyis<sup>1</sup> mi gos so // (A)

'jig rten nam mkha'i mtshan nyid de // nam mkha' la yang mtshan nyid med //

de phyir de yi de rtogs pas // 'jig rten chos kyis mi gos so // (B)

1) AVP : kyis. (Pra Tsha 115b8-116a1 ; AVP Zha 99b8-100a2)

[Ch]: 又如偈曰。

世間如空相 虚空亦無相

若能如是知 於世得解脫 (B) ( Taisho vol.30 72c24-27 )

\*) 上記A偈 a～c 句は BP の本文第 1 偈に相当する(註 12 参照)。漢訳はこの A 偈を欠いている。漢訳 d 句は BP 第 1 偈の d 句に相当する。

<sup>(24)</sup> Ch1: 不起無所有。 Ch2,3: 無生亦無滅。

<sup>(25)</sup> [引用]

『般若灯論』(Prajñāpradīpa)

[Tib]: de bzhin du ( AVP : mdo sde gzhan dag las kyang 'di skad ces / )

gang gis phung po skye med cing // 'byung ba med par yongs shes pa //

de dag 'jig rten spyod 'gyur yang // 'jig rten 'di na gnas pa min //

- (15) 諸々の世間の〔真の〕あり方(世間法)を知らず、二つの〔対立する〕想(\*saṃjñā)に住する者は、巧みでない者(\*akuśala)であって、〈これは正しい、これは間違っている〉と言って、論争(\*vivāda)するであろう。
- (16) 私はこのように、諸々の世俗のことがら(世間法)は、正しくは法性(\*dharmatā)であると知っているから、[P38b] 私が諸々の世間と論争することは決してない。
- (17) この論争のない法は、すべての仏がた(kun sangs rgyas)が説かれたものである。世間の平等性(\*samatā)を理解すれば、ここ(世間)には真実(\*satya)も虚偽(\*mrṣā)もない。
- (18) もし、私が、教えにおいて虚偽あるいはなんらかの真実を〔自らの立場として〕取るのであれば、極端な考えを認めている(\*antagrāha)ことになり、外道と違いがないことになる。
- (19) 諸法は、〔本来〕虚妄なものであり<sup>(26)</sup>、〔そこには〕真実も虚偽もないであるから、私は、世間を超える法を不二(\*advaya)として説くのである。
- (20) 世間のあり方(世間法)がどのようなものであるか、この世間のことを知る巧みなる人は、正しいあるいは間違った見解〔の一方だけ〕を取ることはない。
- (21) およそこの世間が虚空のように清浄(\*viśuddha)である<sup>(27)</sup>と知る人は、大名声ある、世間を輝かすもの(太陽)のごとき者となる。
- (22) 私が見るのと同じような見方で世間を見る人は、十方におられるかの諸仏(\*sambuddha)を見る。
- (23) <sup>(29)</sup>… 諸法には自性がなく、依存する諸法であることがわかる。依存性(縁起)を知る人たちは法性(dharmatā)を知る。
- (24) <sup>(28)</sup>… 法性を知る人たちはかの空性(\*śūnyatā)を知る。…<sup>(28)</sup> 空性を知る人たちは彼ら導師(\*nāyaka)たちを見る。…<sup>(29)</sup>

(Pra Tsha 75a4-5 ; AVP Wa 251a8-251b1)

〔Ch〕: 又如梵王問經偈曰。

已解彼諸陰 無起亦無滅

雖行彼世間 世法不能染 (Taisho vol.30 59b23-25)

(26) Tib: yang dag min (\*abhūta). Ch1: 諸法誠審者. Ch2: 而今實義中. Ch3: 而今實法中. 漢訳の原文には「yang dag par (\*bhūtam)〔究極的な〕真理からすれば」に近い表現があったと思われる。Tib から想定される Skt (abhūta) は、IV-1,2に見られる「非實在 (med pa, \*asat)」と同意とすれば、こども「諸法は〔本来〕非實在であり」とすべきかも知れない。

(27) DHPPH: rnam dag par. BLT: rnam par dag. K: rnam par dag. CH: rnam dag par. Ch1,2,3: 清浄.

(28) [引用]

『般若灯論』(Prajñāpradīpa)

〔Ch〕: 又如梵王問經偈曰。

若有解空者 皆是見法性 (Taisho vol.30 91c10-11)

\*第 23 偈の内容を 2 句に圧縮したと解すべきかも知れない。

(29) [引用]

- (25) 世間についての教説 (\*lokanirdeśa) を聞くであろう<sup>(30)</sup>人たちは、世間的行動 (\*lokacaryā) を取っていても、この世間に住することはない。
- (26) 誰であれ邪見 (\*dṛṣṭi) に住する人は、世間を行じながらもこの世間には住しないという<sup>(31)</sup>… この境地とは、まったく無縁である…<sup>(31)</sup>。
- (27) 仏陀が涅槃なされたあとでも、この忍 (\*kṣānti) を信解する人たち<sup>(32)</sup>にとって、仏陀 (saṃbuddha) は如来の法身として存在しておられる<sup>(33)</sup>。
- (28) この道理 (\*naya) を知る人は、私の法を保持し、私に常に供養している。彼らは世間の師 (\*śāstr) である。
- (29) 世間についてのこの教説 (\*lokanirdeśa) を聞いた人たちに、[P39a] 悪魔がつけこむ<sup>(34)</sup> ことはないであろう。
- (30) 〔世間の〕この様相 (rnam pa, \*ākāra) を知る人たちは富裕であり、偉大な財産を持つ。彼らは布施を常に喜ぶ。彼らは戒律を完成する。<sup>(35)</sup>
- (31) この世間を知る人たちは、忍辱の力を備える。彼らは精進に精通する<sup>(36)</sup>。巧みな彼らは禅定を喜ぶ。<sup>(37)</sup>
- (32) 〔世間の〕この様相を知る人たちは、三昧を完成する。彼らは静けさ (\*upaśama) を喜ぶ。堅固な彼らは智慧が増大する ('phags)。<sup>(38)</sup>
- (33) このような〔教えが〕聞かれる (grags pa) 所では、仏陀は空しくない (仏陀は出現

## 『大乘掌珍論』

Ch: 故世尊言。

[一切法性非眼所見] <sup>1</sup> 諸緣生法皆無自性 [諸有智者] <sup>2</sup> 若知緣生即知法性  
若知法性即知空性 若知空性即見智者 (Taisho vol.30 269a8-10)

1) 他の経典からの混入と思われる。2) 偈の字数、内容から見てこの4字は不要。大正蔵経で9行後にある同じ語句が混入したものであろう。

(30) Tib: rna lam grags par 'gyur ba. *Mvy* 6459: na śravaṇapatham āgamiṣyati, rna lam du grags par mi 'gyur.

(31) Tib: gzhan gyi sa ni 'di ma yin. Ch1: 一切不及此. Ch2,3: 不能及此事.

(32) Ch1: 其樂於忍者. Ch2: 有樂是法者. Ch3: 有樂是忍者.

(33) Tib: de bzhin gshegs pa chos kyi sku rdzogs pa'i sangs rgyas de la bzhugs. Ch1: 於彼佛現在 導師之法身. Ch2: 佛則於其人 常現於法身. Ch3: 佛則於其人 常現於世間.

(34) Tib: glags kyang rnyed pa. Cf. *SP* : na ca tatra māraḥ pāpiyān avatāraṃ lapsyate. (145.2-3)

(35) 漢訳はこの第30偈に「智慧」を入れる。Ch1: 是黨大智慧. Ch2,3: 則爲大智慧.

(36) L: rtogs par rig(\*gatiṅgata). BPh: rtog par rig. CKNPT: rtags par rig. DH: rtags par rigs. Ch1: 遊歩於精進. Ch2: 勇健. Ch3: 進取大精進. Cf. *SP*: この賢者吉祥胎菩薩は、煩惱のない知に精通している。

śrīgarbho eṣo vidu bodhisattvo gatiṅgato jñāni anāsravasmin // (ch.1 v.83ab)

byang chub sems dpa' dpal snying mkhas pa 'di // zag med ye shes 'di ni rtogs par rig //

(37) Ch3 は第30, 31偈を12句とする。最後の3句 (獲得大神通 智慧如實知 一切世間道) は、他版に見られない。

(38) Ch1,2 はこの偈を欠く。

する). 偉大なる人(大士)はまもなく悟りの座に赴くであろう.

- (34) 世間についての教説(\*lokanirdeśa)を聞くであろう人たちは、狡猾な悪魔をうち負かして、すぐれた悟りを悟ることであろう。(39)

(V-1)

その時、世尊は、ブラフマー神であるヴィシエーシャチンティンに次のように仰せになられた。  
「ブラフマー神よ、如来は世間の領域(\*viṣaya)から超出することによって、世間、世間集、世間滅、世間滅道を説き示す(\*prajñapayati)。ブラフマー神よ、そのうち、世間というのは五蘊のことである。それ(五蘊)に執着することが世間集である。諸蘊の尽と滅とが世間滅である。諸蘊を求めることと求めないこととの二つがないことが〔世間滅〕道である。

さらにまた、ブラフマー神よ、<諸蘊、諸蘊>と様々に説き示されていることに関して語ったり、語られたことを見たりすることが世間である。その見たことに随うことが世間集である。その見たことがあるがままで〔しかも〕その相が滅していることが世間滅である(40)。それらの見たことを〔相として〕取らないことを習得する道が世間滅道である。ブラフマー神よ、私はこのことを考えて、『私はこのひと尋の身体中において、世間・[P39b] 世間集・世間滅・世間滅道を説き示した』(41)と言ったのである」

その時、ブラフマー神であるヴィシエーシャチンティンは、世尊にこう申し上げた。

「世尊よ、如来は四聖諦を説かれましたが、世尊よ、聖諦(42)とは何ですか」

その時、世尊は仰せになられた。

「ブラフマー神よ、『これは苦である』というのは聖諦ではない。ブラフマー神よ、(43)…『これは苦の集である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道である』というのは聖諦ではない。なぜかと言えば、(49)…ブラフマー神よ、もし『これは苦である』というのが聖諦であるならば、畜生である牛やロバ、地獄の生き物すべてにも、聖諦があることになってしまうだろう。

(39) Ch1はこの偈を欠く。

(40) Tib: gang lta ba de ji lta ba bzhin du mtshan nyid 'gag pa de ni 'jig rten 'gag pa zhes bya'o. Ch1: 其所見者自然之想。斯則名曰爲滅盡也。Ch2,3: 是見自相名世間滅。漢訳に依れば「見たことのあるがままのすがたが世間滅である」という意になる。

(41) Cf. *Larik*:

一尋ほどの身体において、世間と世間集と、滅に至る道があると私は仏子たちに説く。  
śārīre vyāmamātre ca lokam vai lokasamudayam /  
nirodhagāminī pratipad deśayāmi jinaurasān // (ch.10, v.672)  
此一尋身中 苦諦及集諦 滅及於道諦 我爲諸弟子。(Taisho vol.16 581a29-b1)

(42) チベット訳は「聖諦(āryasatya)」を多くの場合「'phags pa rnams kyi bden pa (聖人たち[にとって]の真理)」と訳している。以下、ārya-を'phags pa rnamsとしている場合、聖と表記して他と区別する。なお、「四聖諦」「聖」の原義については、榎本[2009]参照。

…(43) なぜかと言えば、このように、彼らは、苦痛を経験している (\*duḥkhavedanānubhūta) からである。ブラフマー神よ、『これは苦の集である』というのが<sup>聖</sup>諦であるならば、様々な生存状態 (\*gati) として発生するあらゆる生存状態に生まれる生き物たち (\*sattva)<sup>(44)</sup>にも、聖諦があることになってしまうだろう。[なぜかと言えば、彼らは集によって様々な生存状態に生まれるからである。]<sup>(45)</sup> [そういう意味で、集は聖諦ではない]<sup>(46)</sup> 『これが滅である』というのが<sup>聖</sup>諦であるならば、実体 (\*dngos po, \*bhāva, vastu) を滅することによって涅槃を求め、滅を見ることが(断滅見)に落ちて断滅を説くあらゆる者にも聖諦があることになってしまうだろう。[なぜかと言えば、彼らは断滅の法を涅槃と説いているからである。そういう意味で、滅は聖諦ではない。]<sup>(47)</sup> 『これが道である』というのが<sup>聖</sup>諦であるならば、これは、有為的な死 (dus byas, \*kālakṛyā) からの超出を求めることであり、有為道を対象として (dmigs pa, \*ālambana) [修行する] あらゆる者にも聖諦があることになってしまうだろう。[なぜかと言えば、彼ら是有為の法に依って有為の法から離脱することを求めているからである。そういう意味で、道は聖諦ではない。]<sup>(48)</sup> (50)… 51)… それゆえ、ブラフマー神よ、このことによって、『苦・集・滅・道は [P40a] <sup>聖</sup>諦ではない』と君は知るべきである。以上のように、ブラフマー神よ、苦が生じないこと、それが<sup>聖</sup>諦である。…<sup>(49)</sup> 集に従わないこと、これが<sup>聖</sup>諦である。あらゆる法は完全に寂滅しているのであって、生滅がないこと、これが<sup>聖</sup>諦である。あらゆる法に関して平

(43) Cf. 『大般涅槃經』: 「良家の子よ、〔世間で〕苦と言われているものを〔私は〕聖諦とは名づけけない。なぜかと言えば、もし〔そのような〕苦を苦聖諦と言うのであれば、〔畜生である〕牛、羊、ロバ、馬や地獄の生き物すべてに〔苦〕聖諦があることになってしまうからである」善男子。所言苦者不名聖諦。何以故。若言苦是苦聖諦者、一切牛羊驢馬及地獄衆生應有聖諦。(Taisho No.374 vol.12. 406b12-14), 『大智度論』: 若以苦諦得道、一切衆生牛羊等亦應得道。(Taisho No.1509 vol.25. 720c10-11)

(44) Tib: 'gro ba rnams su 'byung ba'i 'gro ba thams cad du skyes pa'i sems can rnams. Ch1: 一切五趣所生群衆。Ch2: 一切在所生處衆生。Ch3: 六道衆生。

(45) Ch2,3のみ。

(46) Ch3のみ。

(47) Ch3のみ。

(48) Ch3のみ。

(49) [引用]

『順中論義入大般若波羅蜜經初品法門』

<sup>Ch</sup>: 如勝思惟梵天問經。

佛言。「梵天。若彼苦是實聖諦者、一切牛猪諸畜生等應有實諦。何以故。以彼皆受種種苦故」。又言。「梵天。若彼集是實聖諦者、六道衆生應有實諦。何以故。以彼因集生諸趣故」。又言。「梵天。若彼滅是實聖諦者、一切世間墮邪斷見說滅法者應有聖諦。何以故。彼說滅法爲涅槃故」。又言。「梵天。若彼道是實聖諦者、緣於一切有爲道者應有實諦。何以故。以彼依有爲法。求離有爲法故。以是故知苦非實諦」。又復說言。「知苦無生。是名苦實聖諦」。(Taisho vol.30 43a26-b8)

等性であること、不二の道を修習すること、これが<sup>50</sup>聖諦である。…<sup>(50)</sup>…<sup>(51)</sup>

(V-3)

<sup>(53)</sup>… ブラフマー神よ、諦(\*satya)、諦と言われるものは、<sup>(52)</sup>… 実(\*satya)でもなく…<sup>(52)</sup>、虚(\*mṛṣā)でもない。…<sup>(53)</sup> 虚とは何かと言えば、自我(ātman)に執着することであり、有情(\*sattva)に執着することであり、生命体(\*jīva)に執着することであり、人格主体(\*pudgala)

<sup>(50)</sup> [引用]

『般若灯論』(Prajñāpradīpa)

[Tib]: de bzhin du (AVP : 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las / )

tshangs pa rnam grangs des kyang khyod kyis 'di ltar shes par bya ste / sdug bsngal dang / kun 'byung ba dang / 'gog pa dang / lam ni 'phags pa rnams kyi bden pa ma yin gyi / 'di ltar sdug bsngal dang / kun 'byung ba dang / 'gog pa dang / lam ma skyes pa ni 'phags pa rnams kyi lam mo (//)

zhed bya ba dang /

(Pra Peking ed. dBu-ma Tsha 182a8-b2 ; AVP Peking ed. dBu-ma Wa 319b5-6)

[Ch]: 又如梵王問經中說。云何名聖諦。若苦若集若滅若道不名聖諦。彼苦等不起乃名聖諦。

(Taisho vol.30 90a12-14)

当該箇所 요약 に近い。『般若灯論』における完全な引用は次註に見られる。

<sup>(51)</sup> [引用]

『般若灯論』(Prajñāpradīpa)

[Tib]: de'i phyir (AVP : 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las / )

tshangs pa rnam grangs des kyang khyod kyis<sup>1</sup> 'di ltar rig par bya ste / ji ltar sdug bsngal dang kun 'byung dang 'gog pa dang lam ni 'phags pa rnams kyi bden pa ma yin gyi / tshangs pa 'di ltar sdug bsngal gyi skye ba med pa gang yin pa de 'phags pa rnams kyi bden pa yin pa dang kun 'byung gi kun 'byung ba med pa gang yin pa de 'phags pa rnams kyi bden pa yin pa dang / chos thams cad gtan du 'gags<sup>2</sup> pa dag la gtan 'gog pa gang yin pa de 'phags pa rnams kyi bden pa yin pa dang / chos thams cad mnyam pa nyid dag la gnyis su med pa nyid du lam bsgom pa gang yin pa de 'phags pa rnams kyi bden pa yin par shes par bya'o //

zhes bya ba la sogs pa gsungs pa de dag grub pa yin no // 1) Pra: kyi. 2) Pra: bkag.

(Pra Peking ed. dBu-ma Tsha 293b8-294a3 ; AVP Peking ed. dBu-ma Wa 396a2-5)

[Ch]: 如梵王所問經說。

佛告「梵王。以此門應知苦非聖諦。知集滅道亦非聖諦。復次云何是聖諦耶。梵王。若苦無起是名聖諦。集無能起是名聖諦。見一切法畢竟如涅槃無起滅者是名聖諦。若知諸法平等無二修於道者是名聖諦。(Taisho vol.30 127c23-28)

<sup>(52)</sup> Tib: gang bden pa yang ma yin. Ch3: 非實語。Ch1, 2 はこの部分を欠く。

<sup>(53)</sup> [引用]

『順中論義入大般若波羅蜜經初品法門』

[Ch]: 是故世尊說言。

「梵天。言實聖諦實聖諦者，何處無實無妄語」等。(Taisho vol.30 43c17-18)

に執着することであり、<sup>(54)</sup> <sup>(55)</sup>… 断 (\*uccheda) に執着することであり、常 (śāśvata) に執着することであり…<sup>(55)</sup>、発生 (\*udaya) に執着することであり、消失 (\*vyaya) に執着することであり、生起 (\*utpāda) に執着することであり、消滅 (\*nirodha) に執着することであり、輪廻に執着することであり、涅槃に執着することである。それが、虚と言われる。<sup>(56)</sup>… これら [の虚] に執着することなく、[自分の見解が] すぐれていると誇ることがなければ、それが諦 (\*satya) である。…<sup>(56)</sup>

苦をよく知るということは虚である。集を捨て去るということは虚である。滅をまのあたりにするということは虚である。道を修習するということは虚である。なぜかと言えば、彼らは仏陀の語られた念 (\*smṛti) を失ってしまっている (nyams pa, \*hīna)<sup>(57)</sup> からである。だから、虚というのである。

仏陀が語られた念というのは何かと言えば、一切諸法を憶念 (\*smṛti) せず精神集中 (\*manasi-kāra) もしないことが仏陀が語られた念というのである。この念に住する人は一切の相に住しない。一切の相に住しない人は、究極的な真実 (実際, \*bhūtaḥ) に住する。究極的な真実に住する人は意 (yid, \*manas) に住することがない。[意に] 住しない人は、真実を語ることもないし、虚偽を語るもない。それゆえ、ブラフマー神よ、[P40b] こういう意味で (\*anena paryāyena), <sup>(58)</sup>… 実なく虚なきことが 聖 諦と知るべきである。…<sup>(58)</sup>

#### (V-4)

ブラフマー神よ、しかしながら、諦 (\*satya) と言われるものは、実でない (\*asatya) のではない<sup>(59)</sup>。如来がたが出現なされようとなされまいと、法性 (\*dharmatā)・法界 (\*dharmadhātu)<sup>(60)</sup> は確立している。<sup>(61)</sup> それと同じように、輪廻と涅槃とはいずれも常に途切れることなく 聖 諦である。なぜかと言えば、ブラフマー神よ、輪廻を捨てるから 聖 諦なのではない。涅槃を得るから 聖 諦なのではない。ブラフマー神よ、これら四聖諦をそのように理解し直証する (\*sākṣātkāra)

<sup>(54)</sup> 漢訳はそれぞれ 1 句を加える。Ch1: 著於男女。Ch2: 著養育者。Ch3: 著人。Cf. *Laṅk*: ātma-sattva-jīva-poṣa-puruṣa-pudgala ....(74.22) ; *Su*: ātmsa-sattva-jīva-poṣa-pudgala-manuja-māṇava ....(47.8-9).

<sup>(55)</sup> Ch1, 2 はこの部分を欠く。

<sup>(56)</sup> Ch2 はこの部分を欠く。Ch1: 此諸所受、於諸所受無依倚亦無所求斯謂為諦。Ch3: 梵天。若不著如是見不觸如是見不取如是見、是為實語。

<sup>(57)</sup> Ch1: 佛所教化八道品若四依止。Ch2: 是人違失佛所護念。Ch3: 不隨順佛所許念。

<sup>(58)</sup> Ch1: 當作斯觀無實無虛乃為聖諦。Ch2: 當知若非實非虛者是名聖諦 Ch3: 當知若非實語非妄語者是名聖人實聖諦也。

<sup>(59)</sup> Tib: mi bden pa ma yin. Ch1: 審者為諦所謂諦者無所生無所諦。Ch2: 實者終不作不實。Ch3: 言實實者古今實故。

<sup>(60)</sup> BKLPhT: chos nyid chos kyi dbyings. CDHNP: chos kyi dbyings. Ch2: 法性常住。Ch3: 法性常如是法界恒如是。

<sup>(61)</sup> Cf. *SN*: uppādā vā tathāgatānam anuppādā vā tathāgatānam ṭhitā va sā dhātu. (II 25.18-19).

人は真実を語る者<sup>(62)</sup>である。

(V-5)

また、ブラフマー神よ、未来において、身体を修習せず、心を修習せず、戒を修習せず、智慧を修習しない比丘が生じるであろう。彼らは、苦の生起を苦聖諦と言うであろう。生起 (\*samudaya) するから集聖諦 (\*samudayāryasatya) だと言うであろう。実体を滅するから滅聖諦だと言うであろう。道によって発生するから道聖諦だと、二〔つの対立する想〕として言うであろう。<sup>(63)</sup>このような愚かな者たちを、私は外道の弟子 (\*śrāvaka) と呼ぶ。実体を滅するから滅聖諦である<sup>(64)</sup> と言うような人たちは、邪道に墜ちた者たちである。私は彼らの師ではなく、彼らは私の弟子ではない。

ブラフマー神よ、見なさい。私は、悟りの座に坐って、「実 (\*satya)」あるいは「虚 \*mrṣā) とされるものを理解 (\*adhigama) したのではない。自らが理解しなかった法を如来が他の人に教示するということがあるだろうか。語ることがあるだろうか」

〔ブラフマー神が〕申し上げる。「世尊よ、そのようなことは [P41a] ございません」

世尊が仰せになる。「如来がたの悟りは対象がなく (\*anālambana)、無執着 (\*agraha) であり、あらゆる〔輪廻的〕生存状態 (\*sarvabhavagati) から離れている<sup>(65)</sup>」

(VI-1)

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティン (V) は世尊にこう申し上げた。

「世尊よ、もし如来が悟りの座に坐って、いかなる法も認識の対象とはしない (無所得, \*anālambana) のであれば、どのようなことを理解 (adhigama) したからとして、<如来は悟りを得、正しく完全に悟った>とされるのでしょうか」

世尊が仰せになる。「ブラフマー神よ、〔お前は〕どのように考えるか。私が有為もしくは無為の法として説いて来たものは、<sup>(66)</sup>… その通り (de bzhin, \*tathā) なのか、あるいは、そうでない (de lta ma yin, \*anyathā) のか …<sup>(66)</sup>」

〔V が〕申し上げる。「<sup>(67)</sup>… 世尊よ、〔諸法は本来〕非実在です。善逝 (\*sugata) よ、非実在です …<sup>(67)</sup>」

(62) Ch2: 世間実語者。

(63) Tib: lam gyis 'byung ba'i phyir lam 'phags pa'i bden pa gnyis su smra bar 'gyur te. Ch1: 又説當求行於徑路, 是謂二諦馳騁其行. Ch2, 3: 以二法求相是道諦.

(64) Ch1: 破壊正諦而自放逸. Ch2, 3: 破失法故説言有諦.

(65) Ch1: 是爲顛倒迷惑之道. 不能獨除一切所趣. Ch2, 3: 以諸法無所得故, 諸法離自性故, 我菩提是無貪愛相. Ch2, 3 の解釈 (「諸法は認識の対象にならず自性 (\*svabhāva) ととも無縁なのであるから、私の悟りに〔諸法に関して説こうと〕執着の相はない」の方が文脈には合致している).

(66) Ch1: 爲有爲無, 爲實爲虛. Ch2, 3: 爲實爲虛妄耶.

(67) Tib: bcom ldan 'das ma mchis pa lags so, bde bar gshegs pa ma mchis pa lags so. Ch1: 爲虛. 天中天, 無所有也. Ch2: 是法虛妄非實 Ch3: 世尊, 是法虛妄非實. 修伽陀, 是法虛妄非實. Tib の ma mchis pa lags は med pa yin の丁寧体. 漢訳はこの世尊と梵天の問答を、「諸法は実なのか虚 (虚妄) なのか」「虚です」と解しているようである。ただし、Ch1 が「無所有」ともしているように、答の Skt 原文には asat もしくはこれに類する表現があったと想

世尊が仰せになる。「非實在なるもの (med pa) は、存在しているのかしていないのか (yod dam, 'on te med)」

〔V が〕 申し上げる。「世尊よ、非實在なるものは、存在しているとか、していないとか言うことはできません」<sup>(68)</sup>

世尊が仰せになる。「存在することもなく存在しないこともないような法を悟る (\*abhisambuddha) ということがおよそあるだろうか」

〔V が〕 申し上げる。「世尊よ、そういうものを悟るということなどおよそありません」

(VI-2)

世尊が仰せになる。

「<sup>(70)</sup>… ブラフマー神よ、そのように、如来は悟りの座に坐って、非實在であり (med pa) 顛倒から生じた煩惱は、<sup>(69)</sup>… 究極的には本来 (shin tu rang bzhin gyis, \*atyantaprakṛtyā) 不生をその本質 (ngo bo nyid, \*svabhāva) としている …<sup>(69)</sup>のだと知った (\*ā√jñā) のである。…<sup>(70)</sup> 全く知ることがない、全く理解することがない、というふうにしたのである。なぜかと言えば、ブラフマー神よ、このように、私が悟った (\*abhisambuddha) 法は、〔それを〕 見ることもなく、聞くこともなく、憶念することもなく、理解することもなく、知ることもなく、把握すること (\*grāha) もなく、関係をもつこと<sup>(71)</sup> もなく、語ることもなく、問う<sup>(72)</sup> こともない。あらゆる領域を [P41b] 超出しており、ことばもなく、語ること (rab tu smra, \*pravāda) もなく、考察すること (\*vicāra) もなく、知られることもなく (rtogs par mi rung ba), 文字 (\*akṣara) もなく、表現方法<sup>(73)</sup> もなく、知らせる手立て (rnam par rig pa, \*vijñapti) もない。ブラフマー神よ、およそ虚空に等しいそのような法を〔お前は〕 理解したいと思うのか」

定される。「非實在」「虚妄」は諸法を幻の如きものとする本經においては実質的には同義となる。「虚妄であり非實在である」とすれば正確なのかもしれないが、Tib は一貫して、med pa とするので、以下、Tib にしたがって「非實在」という訳語に統一する。

<sup>(68)</sup> Ch3 は次の一節を加える。Ch3: 梵天, 於汝意云何。若法非有非無是法有得者不。梵天言。世尊, 若法無者彼法不得言有不得言無。

<sup>(69)</sup> Ch1: 本常清淨空無自然。Ch2: 畢竟空性。Ch3: 畢竟不生。

<sup>(70)</sup> [引用]

a 『大乘掌珍論』

〔Ch〕: 如契經言。〔汝不應以現觀證得。觀於如來體是無爲。出過一切眼所行故。〕<sup>1</sup> 如是梵志。如來安坐菩提座時, 證一切法皆無所得, 永斷一切虚妄顛倒所起煩惱。 (Taisho vol.30 277c23-27) 1) 他の經典からの混入と思われる。

b 『般若灯論』 (*Prajñāpradīpa*)

〔Ch〕: 如經說。佛坐道場, 知諸煩惱無體無起, 從分別起自性不起。 (Taisho vol.30 107b15-16)

<sup>(71)</sup> Tib: sbyar ba (\*prayukta?). Ch1: 無著Ch2,3: 不可著。

<sup>(72)</sup> Tib: rjes su sbyor ba. Ch1: 無所趣。Ch2, 3: 不可難。VKN: anuyukta, rjes su sbyor ba (ch.4 sec.18). AD: anu√yuj, to ask, question.

<sup>(73)</sup> Tib: tshig gi lam. Ch2: 言說道。Ch3: 言語道。KP: rutavākpatha, smra ba'i tshig gi lam (sec.125).

[V が] 申し上げる。「そのようことは御座いません。世尊よ、諸仏世尊は、偉大なる悲心 (\*karuṇā), 不可思議の法を得ておられます。このような寂滅した法を悟ってのち (\*abhibudhya), 文字と語源解釈 (\*nirukti) によって、他の人々に理解させなされることは、すばらしい (\*āścarya) ことです。世尊よ、如来によって説かれた法を信じる人々は、[けっして] 劣った善根を持っているわけではありません。それはなぜかと言え、世尊よ、この法は一切の世間と対立矛盾 (mi mthun pa, \*viruddha) しているからです。[なぜかと言え、世間はこのような法を信じることができないからです]<sup>(74)</sup>」

## (VI-3)

<sup>(75)</sup>… [世尊が] 言う。「どのように一切世間と対立矛盾しているのか」

[V が] 申し上げる。…<sup>(75)</sup>

「世尊よ、<sup>(76)</sup>… もし世間が真実 (\*satya) に執着するのであれば、この法は真実でもなく虚偽でもありません。…<sup>(76)</sup> 世間が法に執着するのであれば、この法は法でもなく非法でもありません。世間が涅槃に執着するのであれば、この法には輪廻もなく涅槃もありません。世間が善に執着するのであれば、ここには善もありませんし、不善もありません。世間が楽に執着するのであれば、ここには楽も苦もありません。世間が仏出現に執着するのであれば、ここには仏出現もなければ涅槃もありません。法は説きますが、それは語られるものではありません (brjod du ma mchis, \*anabhilāpya)。僧団を説きますが、[それは] 無為なのです。それゆえ、この法は、[P42a] 一切世間と対立矛盾しているのです。

世尊よ、たとえば、火と水とが、あるいは水と火とが [同時に] あるということは、対立矛盾しているように、煩惱と悟り、悟りと煩惱は、対立矛盾しています。それはなぜかと言え、如来は、煩惱は非実在 (ma mchis pa) であると悟られたからです。[悟ることのできるような法は存在しないのです。]<sup>(77)</sup> 説きはしますが、眼に見える形はないのです。よく理解はしますが、分別するという事はないのです。[涅槃を証しますが、知ることはありません]<sup>(78)</sup> <sup>(74)</sup>… 修習はしますが、二つ [の対立する想] をなすことはありません。直証はしますが、得るということは

(74) Ch3 のみ。

(75) Tib, Ch3 のみ。Ch1, 2: 所以者何。

(76) [引用]

『般若灯論』(Prajñāpradīpa)

[Tib]: de bzhin du (AVP: 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las / )

'jig rten ni bden pa la mngon par zhen pa yin gyi / chos 'di ni bden pa yang ma yin / brdzun pa yang ma yin no // (Pra Tsha 190a8-b1 ; AVP Wa 344b5-6)

[Ch]: 又如梵王所問經中說。

世間愚人執着諸諦。此法非實亦非虛妄。(Taisho vol.30 92a17-18)

(77) 3 漢訳のみ。Ch1: 成正覺者無逮正覺。Ch2: 而無法不得。Ch3: 無法可證。

(78) Ch2,3 のみ。

ありません。苦から抜け出すことはしますが、寂靜はありません。…<sup>(79)</sup>

世尊よ、良家の子であれ、良家の娘であれ、この〈法の導きのすがた〉(\*dharmanayākāra)を信解するならば、すべての邪見(\*dr̥ṣṭigata)から抜け出すことでしょう。

(V-4)

〔彼らは〕如来に近侍し、過去世において勝者(仏陀)に供養(\*pūrvaḥjinaḥkṛtādhikāra)をなしたのです。彼らは、善知識(\*kalyānamitra)によって守護されています。彼らは善根が燃え上がっている<sup>(80)</sup>ので、優れているもの(大乘)(rgya chen po, \*udāra)を信解するでしょう。彼らは如来の蔵(mdzod, \*kośa)を保持しているので、財宝(gter, \*kośa)を獲得するでしょう。彼らはよくなされるべき業(\*karman)をなしてきているので、事業(\*karmānta)に巧みに順じるでしょう。彼らは仏陀の家系(\*buddhavaṃśa)を保持しているので、良き生まれ(\*abhijāta)となるでしょう。彼らはすべての煩惱を捨て去っているので、大いなる喜捨をするものとなるでしょう。彼らは戒の力を得ていますが、煩惱の力はありません。<sup>(81)</sup>身命(\*kāyajīva)を捨てているので<sup>(82)</sup>、彼らは忍辱の力をもつでしょう。彼らは、心疲れることがないので、精進の力を持つでしょう。彼らは、悪業(\*pāpakarman)を焼き尽くしているので、禪定の力を持つでしょう。彼らは、邪悪な見解から離れているので、智慧の力を持つでしょう。彼らは[P42b]悪魔がつけこみにくいものとなるでしょう。彼らは敵にうち負かされることはないでしょう。彼らは如来がたを欺くことはないでしょう。<sup>(83)</sup>彼らは、法の自性(\*prakṛti)を説くのが巧みであるから、正しいことを語るでしょう。彼らは究極的な真理(第一義)の法を説くから、真実を語るでしょう。彼らは如来に守護されるでしょう。彼らは交わりやすい(\*grog na bde ba, \*sukhasaṃvāsa)から、柔和な人(des pa, \*sūrata)となるでしょう。<sup>(84)</sup>彼らは聖なる財産というかたちで財産を持つ者となるでしょう。彼らは聖なる家系ということに満足を求める<sup>(85)</sup>者となるでしょう。〔貪りから離れているので〕<sup>(86)</sup>養いやすく満足させやすいでしょう。彼らは彼岸にいる(\*pāraga)ので、安息(\*āsvasta)を得ることでしょう。彼らは〔彼岸に〕渡

<sup>(79)</sup> Ch2に欠ける。

<sup>(80)</sup> Tib: dge ba'i rtsa ba 'bar ba. Ch1: 殖衆徳本. Ch2: 善根深厚. Ch3: 妙善根得増上. Cf. VKN: avaropitakuśalamūla (Tib: dge ba'i rtsa ba bskyed pa). (ch.2 sec.1)

<sup>(81)</sup> Ch3: 當知是人得持戒力, 以無起心破戒法故。

<sup>(82)</sup> Ch1: 無疆志勇. Ch2: 非瞋恚力。

<sup>(83)</sup> Ch1: 終不誑惑於世間人. Ch2: 當知是人不誑世間. Ch3: 當知是人不誑世間, 以其不誑諸如来故。

<sup>(84)</sup> Ch1: 則樂仁和, 遊居安處. Ch2: 當知是柔和軟善同止安樂. Ch3: 當知是柔和軟善, 以同止住善安樂故。

Cf. *Mv*: ブッダによって柔和で交わりやすいと予言された未来の菩薩たちには喜びが生じるであろう。

ye te vyākṛtā buddhena bodhisatvā anāgatā /  
sūrataḥ sukhasaṃvāsā teṣāṃ tuṣṭir bhaviṣyati //( vol.2 355.20-21)

<sup>(85)</sup> KPPH: chog 'tshal ba. T: cho ga 'tshal ba. B: tsho ga 'tshal ba. CDHLN: mchog 'tshal ba. Ch1: 知止足. Ch2, 3: 能知足. *Mvy* 2371: āryavaṃśasamtuṣṭaḥ, 'phags pa'i rigs [k]yis chog shes pa, 聖種知足。

<sup>(86)</sup> Ch2,3のみ。

りきっていない人々を渡らせるでしょう。彼らは解脱していない人々を解脱させるでしょう。彼らは安息を得ていない人々に安息を与えることでしょう。涅槃していない人々を涅槃させることでしょう。(87)

## (VI-5)

彼らは〔正しい〕道を説くでしょう。(88) 彼らは涅槃を説くでしょう。(89) 彼らはあらゆる薬草をよく知っている (yongs su 'tshal ba, \*parijñāta) ので、医者たちの王 (\*vaidyārāja) となるでしょう。彼らはあらゆる病を鎮めるので、薬草のごときものとなるでしょう。彼らは知の力を持つ者となるでしょう。(90) 彼らは威神力による力をもつ者となるでしょう。(91) 彼らは他者によって導かれること (\*aparapraṇeya) ことはない(92)ので、勇猛さをもつ(93) でしょう。彼らは怖れゆえに毛が逆立つことはないので、獅子の如き者となるでしょう。彼らは血統が良い (\*ājāneya) ので、牛 (ba lang, \*go)(94) の如き者となるでしょう。彼らは心がよく訓練されている (\*sudāntacitta) ので、大象 (\*mahānāga) となるでしょう。(95) 彼らは多くの取り巻き (\*parivāra) を集めるので、雄牛 (\*rṣabha) となるでしょう。(96) 彼らは悪魔と敵対者を調伏するので、勇者となるでしょう。彼らは集会を怖れることがないので、堅固な者となるでしょう。彼らは [P43a] 無畏を得ているので、打ち負かされることがないので。彼らは真実を説く者たちを畏れることはないであります。

## (VI-6)

彼らは自分 (\*śuklapakṣa) を満たしているので、月に等しき者となるでしょう。(97) 彼らは智

(87) Cf. *SP* : 「私は〔彼岸へ〕渡り終わって〔人々を〕渡らせ、すでに解脱して〔人々を〕解脱させ、安息を得て〔人々を〕安息させ、完全な涅槃に入って〔人々を〕涅槃に入らせよう」 tīrṇas tārayāmi, mukto mocayāmi, āśvasta āśvāsāyāmi, parinirvṛtaḥ parinirvāpayāmi. (123.2-3)

(88) Ch3: 當知是人爲能示者, 以能爲人示正道故。

(89) Ch3: 當知是人知正道者, 以是人能脫未脫故。

(90) Ch3: 當知是人爲有大力, 以是人有智慧力故。

(91) Tib: de dag mthus spro ba ldan par 'gyur ro. Ch1: 速獲勢勢以爲歡樂。Ch2: 當知是人爲有大力堅固究竟。Ch3: 當知是人有不退力, 以有堅固畢竟法故。

(92) Cf. *Larik*: 「私と他の菩薩大士たちは、自内証の聖なる知と一乗とに熟知した者、ブツダの教えに関して他者によって導かれることのない者となることでしょう」 ahaṃ ca anye ca bodhisattvā mahāsattvāḥ pratyātmāryajñānaikayānakūśalā aparapraṇeyā bhaviṣyanti buddhadharmeṣu. (54.26-27)

(93) Tib: rtsal dang ldan pa. *Mvy* 633: vikrānta, rtsal ldan. Ch1: 得出自在。Ch2,3: 有精進力。

(94) Ch1: 神龍。Ch2: 象王。Ch3: 大龍。Cf. *Pvsp* : ājāneyair mahānāgaiḥ. (75.6)

(95) Cf. *Sukh* : 「その心が最高に統御されているという点で大象のごとき者たちである」 mahānāgasadṛśāḥ paramasudāntacittatayā. (52.22)

(96) Cf. *Sukh* : 「大きな集団を圧倒するという点で雄牛のごとき者たちである」 rṣabhasadṛśā mahāgaṇābhībhavanatayā. (52.21)

(97) Cf. *KP* 「カーシャパよ、また例えば、自分において月輪が満ちていき大きくなっていくように、カーシャパよ、心の清

慧によって光り輝いているので、太陽の如き者となるでしょう。彼らは大きな闇を離れているので、灯火の如き者となるでしょう。彼らは愛憎というものが無いので、拠り所 (gzhi rten)<sup>(98)</sup> の如き者となるでしょう。<sup>(99)</sup> 彼らはすべての生けるもの (\*sattva) を育成するので、地 (\*pṛthivī) に等しき者となるでしょう。<sup>(100)</sup> 彼らはすべての法に住することがないので、風に等しき者となるでしょう。彼らはすべての煩惱の汚れを洗い落としている<sup>(101)</sup> ので、水に等しき者となるでしょう。彼らはすべての思い上がり (rlom sems, \*manyānā) を滅している<sup>(102)</sup> ので、火に等しき者となるでしょう。彼らは動かすことができないので、スメール山に等しき者となるでしょう。彼らは決意 (\*adhyāśaya) が堅固で割られことがないので、ダイヤモンドのように堅固な鉄圍山の如き者となるでしょう。彼らはすべての他学派の論争者 (phas kyi rgol ba) が簡単には打ち負かすことのできない (gdul dka') 者となるでしょう<sup>(103)</sup>。彼らはすべての声聞・独覚が〔その智を〕窺い知ることのできない者<sup>(104)</sup>となるでしょう。彼らはすべての法の宝を集めているので、海の如き者となるでしょう。彼らはすべての煩惱を尽くしている<sup>(105)</sup> ので、パーターラ<sup>(106)</sup>の如き者となるでしょう。彼らは法を求めることに飽きることはない (\*atṛpta) でしよ

らかな菩薩はすべての白く〔清らかな〕法が増大していく tadyathāpi nāma kāśyapa śuklapakṣe candramaṇḍalaṃ paripūryate vardhate ca, evam eva kāśyapa āśayaśuddho bodhisatvaḥ sarvaśukladharmair vardhate. (sec.34)

<sup>(98)</sup> Cf. *Śikṣ*: 「〔彼は〕思念という堅固な拠り所にしっかりと立っている」 āśaye dṛḍhatale pratīṣṭhitāḥ (Tib: bsam pa'i gzhi rten brtan la rab gnas pa). (60.27)

<sup>(99)</sup> Ch1: 離於諸著無有増減. Ch2: 當知是人樂行捨心離諸憎愛. Ch3: 當知是人心堅如地, 以得遠離憎愛心故.

<sup>(100)</sup> Cf. *KP* 「カーシャパよ、また例えば、大いなる地 (四元素のうちの地、また大地) がすべての生けるものの生の支えであり変化することなく見返りを求めることがないように、カーシャパよ、初めて菩提心を起こした菩薩は菩提の座に坐るまでの間、生けるものの生の支えであり〔心が〕変化することなく見返りを求めることもない」 tadyathā kāśyapa iyaṃ mahāpṛthivī sarvasatvopajīvyā nirvikārā niṣpratīkārā / evam eva kāśyapa prathamacittotpādiko bodhisatvo yāvad bodhimaṇḍaṇiṣadanā tāvat sarvasatvopajīvyo nirvikāro niṣpratīkāro bhavati. (sec.29)

<sup>(101)</sup> Tib: 'khru ba (\*prakṣāḷana). Ch1, 2: 洗. Ch3: 蕩. Cf. *Bcvp*: 「他人の功德を耳にした〔ときの〕嫉妬という汚れを洗い落とすために〔次のように〕仰った」 paraguṇaśravaṇeṣyāmalaprakṣāḷanāyāha / (100.27)

<sup>(102)</sup> Tib: . yang dag par 'joms pa. *Mvy* 1601: samudghāta. *Mvy* 2421, 2596: samavahanti. Ch1: 滅除. Ch2, 3: 燒.

<sup>(103)</sup> Cf. *Krp*: 「私が、虚偽の言葉をともなったマントラによって、他学派の論争者を打ち負かすことがありませんように」 na mṛṣāvādasahagatair mantraiḥ parapravādinō vimardeyam (Tib: brdzun du smra ba dang ldan pa'i tshig rnam kyis phas kyi rgol ba 'dul bar ma gyur cig). (162.17-18)

<sup>(104)</sup> Tib: gting dpag dka' ba. *Mvy* 2922: duravagāha. Ch1: 無能及者. Ch2: 不能測. Ch3: 不可度量. *AD*: avagāha, bathing; plunging, immersing(in general), entering into; (fig.) mastering, learning, studying completely. Cf. *MMK*: 「この法は鈍い者たちには修得しがたいことを考慮して、〔この〕法を(説示しようと……)」 dharmam matvāsya dharmasya mandair duravagāhatām // (Ch.24 12cd)

<sup>(105)</sup> Tib: bas pa. Ch1: 蠲除. Ch2: 不現. Ch3: 尽. *TSD*: bas, atīkrānta. *TD*: sbas pa'am mtha' zad pa.

<sup>(106)</sup> Tib: gting. Ch1: 度師. Ch2: 波陀羅. Ch3: 大海. *TSD*: gting, pātāla. pātāla は一般には「地下の深いところにある深坑」あるいは「海中の深淵、洞窟、さらに一種の地獄の意味」などと説明される。たとえば、*Gv* には「輪廻という大密林、苦というパーターラの真ん中に落ち込み……. mahāsamsārakāntāraduḥkḥapātālamadhyaprapatite

う。彼らは智慧によって修習するでしょう。<sup>(107)</sup> 彼らは法輪を転じるといふ点で〔転輪聖〕王に等しい者となるでしょう。彼らは〔すぐれた〕姿を取るのて、シャクラ神（帝釈天）に等しい者となるでしょう。彼らは自在を得ているのでブラフマー神に等しい者となるでしょう。彼らは法（教え）を轟かせるので、〔雷〕雲の如き者となるでしょう。彼らは甘露の雨を降らすので、雨の如き者となるでしょう。

## (VI-7)

彼らは〔五〕根、〔五〕力、〔七〕覚支を [P43b] 増長させるでしょう。彼らは輪廻の泥（\*saṃsāraṇka）から抜け出るでしょう。彼らは仏陀の知に入るでしょう。彼らは仏陀の悟りに接近する（\*āsannī √bhū）でしょう。彼らには智（\*mati）では匹敵する者はいないでしょう。<sup>(108)</sup> 彼らは〔多〕聞という点で等しい者がいなくほどすぐれている（\*asamasama）でしょう。彼らは比較（gzhal ba, \*tulanā）を超えているので、等しい者はいないでしょう。<sup>(109)</sup> 彼らは弁才の無礙なる者となるでしょう。彼らは陀羅尼を得ているので、〔堅固な〕記憶を持つ者となるでしょう。彼らは意味をよく理解している（don rtogs pa）ので、随順の智（'brang bas rtogs pa）を持つ者となるでしょう。<sup>(110)</sup> <sup>(111)</sup>… 彼らは法を正しく分析的に理解するので、智ある者となるでしょう。…<sup>(111)</sup> 彼らは有情の思念（\*āśaya）〔を理解すること〕に巧みな者となるでしょう。彼らは世間に対して利益をなすので、努め励む者となるでしょう。彼らは世間を超える者となるでしょう。彼らは蓮（\*padma）の如く執着がないでしょう。彼らは諸々の世間の

… (245.18)」とある。しかし、同じ *Gv* に、「〔菩提心は〕すべての不善の法を完全に滅するという点で、パーターラである。[bodhicittam] pātālabhūtaṃ sarvākuśaladharmaparyavadānakaṇatayā. (397.1)」とあり、*BP* のこの用例に近い。*Gv* の後者の箇所は *SS* に引用され (16.2-4), pātāla は、Ch: 大地, Tib: sa 'og (地下) と訳されている。*Śikṣā* にも類似の表現が見られる: 「しかし、『弥勒解脱经』には菩提心による悪の浄化が〔次のように〕説かれている。——〔菩提心は〕すべての悪行を焼き尽くすという点で劫〔末の〕燃えさかる火である。すべての不善の法を滅するという点でパーターラである」*āryamaitreyavimokṣe tu bodhicittena pāpaviśuddhir uktā. kalpoddāhāgnibhūtaṃ sarvaduṣkṛtanirdahanatayā. pātālabhūtaṃ sarvākuśaladharmaparyādānakaṇatayā. (98.27-28)*

一方、*BP* の Ch3 は「大海」としているが、『大乘莊嚴經論』には「大海」との関連で用いられる pātāla の例が見られる (*MSA* ch.9 v.82)。この pātāla の語義については別稿で詳細に論じる予定である。

(107) Ch1: 則於智慧而無充溢。Ch2: 當知是人以智慧知足。Ch3: 當知是人爲滿足者, 以有智慧知足法故。

(108) Ch1, 2 はこの一文を欠く。

(109) Ch1: 以過於量悉無有量。Ch2: 當知是人無有量已過量。Ch3: 當知是人不可測量, 以過諸量非可測故。

(110) Ch1, 2 はこの一文を欠く。Ch3: 當知是人則爲能去, 以是人得義隨順故。Cf. *Lañk*: 「それゆえ、マハーマティよ、意味に随順すべきであって、教えを述べた言葉に執着すべきではない」*tasmāt tarhi mahāmate arthānūsārīṇā bhavitavyaṃ (Tib: don gyi rjes su 'brang bar bya'o), na deśanābhilāpābhiniṣṭhena. (33.8-9)*

(111) [引用]『修習次第・後編』(Bhāvanākrama III)

**Skt**: punas tatraivoktam / matimantaś ca te bhaviṣyanti yoniśo dharmān pratyavekṣanatayeti / (*Bhk* 19.11-13)

**Tib**: yang de nyid las / tshul bzhin du chos la so sor rtog pa de dag ni blo gros dang ldan pa yin no zhes gsungs so // (*sDe dge Ki* 63b6-7)

しきたり・ことがら（世間法）に囚われることはないでしょう。

(VI-8)

彼らは巧みなる人々に喜ばれるでしょう。彼らは多聞の人々から尊敬されるでしょう。彼らは智（\*vidyā）ある人々から敬われるでしょう。彼らは神々や人々から供養されるでしょう。彼らは世間の人々から挨拶されるでしょう。<sup>(112)</sup> 彼らは聖なる人々から敬意を表されるでしょう。彼らは声聞・独覚たちによって慕われる<sup>(113)</sup> でしょう。彼らは部分的な行<sup>(114)</sup> を願うことはないでしょう。彼らは欲望がないので、おもねり諂うこと（tshul 'chos, \*kuhana）がないでしょう。彼らは威儀（\*īryāpatha）が美しいでしょう。彼らは〔その〕容姿を見た人に愛される（lta na sdug pa, \*priyadarśana）でしょう。彼らは威光（\*tejas）ゆえに崇敬される<sup>(115)</sup> でしょう。彼らは〔三十二の〕特徴（相）で飾られる（\*lakṣaṇasamalaṅkṛta）でしょう。彼らは〔八十の〕副次的な特徴（随形好）で飾られる（\*anuvyañjanavirājita）でしょう。<sup>(116)</sup> 彼らは仏陀の家系を [P44a] 護持するでしょう。彼らは法の家系をよく守るでしょう。彼らは僧団の家系をしっかり守るでしょう。彼らはすべての仏陀に見られています。彼らは法眼を獲得します。彼らは仏陀の知に関して予言（授記）を受けるでしょう。彼らは三つの忍（\*trikṣānti）<sup>(117)</sup> を具足するでしょう。彼らは悟りの座（\*bodhimaṇḍala）を満たし（\*paripūraṇa）ます。彼らは魔の軍勢をうち負かします。彼らは一切知を獲得します。彼らは法輪を転じるでしょう。彼らは、世尊よ、仏陀のなすべきこと（\*buddhakārya）をなすでしょう。

(VI-9)

世尊よ、この深遠な法の導き<sup>(118)</sup> を聞いて、怖れず、驚かず、驚愕しない人々、また、如来がたのかくの如く深遠で、かくの如く知りがたく、かくの如く見がたく、かくの如く理解しがたいこの悟りを聞いて信解し、保持し、記憶し、他人に広め、この法を実践し、他人にも修行（\*pratipatti）に向かって出発させる、そのような正しい人々（\*satpuruṣa）の称賛を一劫または一劫以上にわたって（\*kalpaṃ vā kalpāvaśeṣaṃ）<sup>(119)</sup> 説いたり、その功德をよく称賛したり

(112) Ch1: 諸禪思衆稽首爲禮。Ch2: 當知是人爲坐禪者之所敬禮。Ch3: 當知是人是可歸命, 以諸衆生所歸命故。

(113) Tib: smon par bgyid pa. Ch1: 欽慕。Ch2: 貪慕。Ch3: 供養。

(114) Tib: nyi tsher spyod pa. Ch1: 遠離土地之行。Ch2: 不食小行。Cf. VKN: 「部分的な行動に心を結びつけてはいけない（しみつたれたことを考えてはいけない）」 mā ca pradeśacaryāyām cittam upanibandhata (Tib: nyi tshe ba'i spyod pa la sems nye bar ma 'dogs shig). (ch.9 sec.11)

(115) Tib: yid chags pa. Ch2: 衆所宗仰。Ch3: 是爲可依。

(116) Ch1,2 はこの一文を欠く。

(117) Cf. SR ch.7: Trikṣāntyavatāraparivarta. 註 190 参照。

(118) Tib: chos kyi tshul zab mo (\*gambhīradharmanaya). Ch1: 趣於深法。Ch2: 法義。Ch3: 甚深法義。Cf. VKN: vimalakīrtiḥ .... gambhīradharmanayasupraviṣṭaḥ (ch.2 sec.1)

(119) Ch1: 於一劫若復過劫。Ch2: 以一劫若減一劫。Ch3: 以一劫若余殘劫。

したとしても、世尊よ、私は正しい人々である彼らの功德の究極にまで至ることはありません」

## (VII-1)

世尊が仰せになる。「ブラフマー神よ、汝は、彼ら正しい人々<sup>(120)</sup>の称賛や功德をどれだけ知っているのか」。

(121)... ブラフマー神が申し上げる。…<sup>(121)</sup>「如来が無礙の仏知によってご存知になられる限りにおいて、彼らのその功德とそれよりもっと優れたものが知られる (*'tshal bar bgyi, \*jānīya*) のです。もし、如来が語られたことの深遠なる意味・句・文字を理解し、意図に基づくことば (*ldem po ngag, \*saṃdhābhāṣya*) を求めて [その意図] に随順して逆らうことなく, [P44b] よく相応して損なうことなく、意味を理解して文字の後を追う (*yi ge'i phyir snyegs pa*) ことがなければ、そういう人々は、(1) 如来がたがどのような言葉で法を説くか、(2) 如来がどのような意図に基づくことばによって法を説くか、(3) どのような方便、(4) どのような道理 (*tshul, \*naya*)、(5) どのような大悲によって、如来が説法する際に決定的な言葉を語るのか、をよく理解する (*rab tu 'tshal*) のです」

(122)... 世尊が仰せになる。…<sup>(122)</sup>「ブラフマー神よ、もし誰かある菩薩がこの<如来の五つの力の行使<sup>(123)</sup>>を理解するならば、彼は、<仏陀のする仕事 (*\*buddhakārya*) によって人々に奉仕する者>だと言われる」

〔ブラフマー神が〕申し上げる。「世尊よ、<如来の五つの力の行使>とはどのようなものですか」

世尊が仰せになる。「(1) 法を語ること、(2) 意図に基づくことばで解説すること、(3) 方便によって法を信解させること、(4) 道理にしたがって説くこと、(5) 大悲に随順すること、ブラフマー神よ、これらが、すべての声聞・独覚たる者にはあずかり知りえない<如来の五つの力の行使>である」

## (VII-2)

〔ブラフマー神が〕申し上げる。「世尊よ、(1) どのようなことばによって如来は諸々の法をお説きになるのですか」

世尊が仰せになる。「ブラフマー神よ、過去を説くこと、未来を説くこと、現在を説くこと、煩

(120) BKLPHT: *skyes bu dam pa de dag*. CDHNP: *skyes bu de dag*. Ch1: 諸正士. Ch2: 是人. Ch3: 彼諸菩薩摩訶薩.

(121) チベット訳のみ。チベット訳は以下の言葉をブラフマー神のものとするが、3漢訳は仏陀のものとする。前後の文脈から見て、註 121, 122 に相当する箇所は本文から削除して、仏陀による一連の説法と取る方がいいと思うが、今は、敬語体を用いて訳しているチベット訳に従っておく。

(122) DHKLT: *bka' stsal pa*. Ch1: 佛告. BCNPPH, Ch2, 3はこの部分を欠く。

(123) Tib: *sbyor ba (\*prayoga)*. Ch1: 如来五力所因療治. Ch2: 如来以是五力説法. Ch3: 如来五力行智. Cf. LV: 「道理・非道理 [を弁別する] 知に巧みであり卑小で部分的な乗り物を捨てて大きな乗り物の功德を修得する力を備え厭うことなく [この] 力を行使するが故に<道理の知という力を備えた>と言われる. *sthānāsthānājñānakuśalahīnaprādeśīkāyānavarjanamahāyānaguṇasamudānayanabalopetātrptabala-prayogatvāt sthānājñānabalopeta ity ucyate*. (312.7-8)

悩 (\*saṃkleśa) を説くこと、清浄 (\*vyavadāna) を説くこと、善 (\*kuśala) と不善を説くこと、世間と出世間を説くこと、有漏と無漏を説くこと、有罪 (\*avadya) と無罪を説くこと、有為と無為を説くこと、自我 (\*ātman)・有情 (\*sattva)・生命体 (\*jīva)・養う者 (\*poṣa)・士夫 (\*puruṣa)・人格主体 (\*pudgala) を説くこと<sup>(124)</sup>、証得 (\*prāpti)・直証 (\*saksātākāra) を説くこと、輪廻と涅槃を説くことである。

ブラフマー神よ、これらの言説は、決定的なものではない (\*apariniṣpanna) という道理 (tshul, \*naya) として説かれた、幻のようなものだと見なければならぬ。無いものを [P45a] 見るといふ道理として説かれた、夢のようなものだと見なければならぬ。虚空に響く声という道理として説かれた、こだまのようなものだと見なければならぬ。様々な条件が整う (rkyen 'dus pa)<sup>(125)</sup> という道理として説かれた、影像 (\*pratibhāsa) のようなものだと見なければならぬ。原因が入り込んでこない (rgyu mi 'pho ba) という道理として説かれた、鏡像 (\*pratibimba) のようなものだと見なければならぬ<sup>(126)</sup>。<sup>(127)</sup> 顛倒して見るという道理として説かれた、かげろうのようなものだと見なければならぬ。不生不滅という道理として説かれた、虚空のようなものだと見なければならぬ。語ることがない (brjod du med) という道理として説かれた、不言説 (smrar med pa)<sup>(128)</sup> と見なければならぬ。

ブラフマー神よ、菩薩がこの説法 (chos smra ba) を知るならば、彼らはあらゆる言説を語りながら、いかなる法にも執着することはない。彼は無執着によって、ガンガー河の砂 [の数] にも等しい劫のあいだ法を説いたとしても途切れることがなく、すべてのことばはみな法界から切り離されることなく説かれたものであり、諸法が [法界から] 切り離されていないことにも執着することがない<sup>(129)</sup>、そういう無礙の弁才知を獲得するのである。ブラフマー神よ、如来はそのような語り方で法を説くのである。

### (VII-3)

ブラフマー神よ、その [如来五力の] うち、(2) どのようにしたら、菩薩は、如来の意図に基づくことば (ldem po ngag, \*saṃdhābhāṣya) に巧みである<sup>(130)</sup> ことを知るのかといえ、ブラフマー神よ、この場合、如来は、煩惱を清浄であると説き、清浄を煩惱であると説く。それに関し、菩薩は、[それは] 意図に基づくことばであると理解しなければならぬ。ブラフマー神よ、

(124) Ch1: 我人壽命. Ch2: 説我人壽命法. Ch3: 説我衆生人丈夫法. Śikṣ が引用する『郁伽長者所問經』に次のようにある。「(森林に住する出家の菩薩は、次のようにその身を考察すべきである。) この身には「我」「有情」「生命体」「養う者」「士夫」「人格主体」「人」は存在しない。実に恐怖とはこの不真實を分別することである。この不真實の妄想を私は妄想分別すべきではない」 nāsty atra kāye ātmā vā sattvo vā jīvo vā poṣo vā pudgalo vā manujo vā abhūtaparikalpa eṣa yad uta bhayaṃ nāma. sa mayābhūtaparikalpo na parikalpayitavyaḥ. (110.13-15)

(125) Ch1: 縁合有. Ch2: 衆縁合. Ch3: 因縁合.

(126) Ch1: 觀辭如鏡像照現故. Ch2: 説如鏡中像因不入鏡故. Ch3 はこの部分を欠く.

(127) Ch1,3 はそれぞれ以下の句を入れる. Ch1: 觀辭如形印之有故. Ch3: 言説如印不轉入故.

(128) Cf. VKN: anudāhāro 'pravyāhāraḥ (Tib: brjod du med pa / smrar med pa). (ch.9 sec.32)

(129) Ch1: 遊諸言辭及所破壞悉無所倚. Ch2: 亦復不著不壞法性. Ch3: 不執着差別之相故.

(130) Ch. VKN: sandhābhāṣyakuśalaḥ (Tib: ldem po ngag la mkhas shing). (ch.7 sec.1)

如来はどうして、煩惱を清浄であると説くのかといえば、煩惱には本性として思惟分別 (rlom sems, \*manyānā) がないので<sup>(131)</sup>、煩惱を清浄であると説くのである。どうして、清浄を煩惱であると説くのかといえば、清浄には本性として思惟分別がないので<sup>(132)</sup>、同じ様に、清浄を煩惱であると説くのである。

ブラフマー神よ、私は、[P45b] 布施によって涅槃を説く。それを愚人たちは理解しない。それに対して、意図に基づくことばに巧みな菩薩は、布施をしてその後〔来世において〕極めて幸福になるが、<sup>(133)</sup>… この場合、いかなる法も移行 ('pho ba, \*saṃkrānti) することはない。移行しないからこそ涅槃なのである。…<sup>(133)</sup> 無作 (\*anabhisamkāra) という道理により、持戒によって涅槃するのである。刹那的であるという道理により、忍辱によって涅槃するのである。取・捨がないという道理により、精進によって涅槃するのである。分別しない (\*avikalpa) という道理により、禅定によって涅槃するのである。無礙という特質 (mtshan nyid, \*lakṣaṇa) により<sup>(134)</sup>、智慧によって涅槃するのである。

法界 (\*dharmadhātu) は貪欲を離れているので、貪欲は離貪を究極とする。法界には怒り (gtum pa, \*caṇḍa) がないので、瞋恚 (\*dveṣa) は真実を究極とする。諸法には愚かさ (rmongs pa, \*mūḍha) がないので、愚癡 (\*moha) は無愚癡を究極とする。死もなく生もないというあり方 (tshul, \*naya) では輪廻は涅槃であり、愛着するというあり方では、涅槃は輪廻である。ことば (\*vyavahāra) として設定されたもの (\*prajñapti) という観点<sup>(135)</sup> からは真実は虚偽であり、思い上がっている (mngon pa'i nga rgyal can, \*abhimānin) 人たちにとっては虚偽は真実である。

さらにまた、ブラフマー神よ、如来は意図に基づくことばという方法 (\*saṃdhābhāṣyaparyāya) によって、自分は常を説く者であると認める (zhal gyis bzhes, \*abhyupa√gam)。自分は、煩惱を語る者、断を語る者、無作 (\*akārya) を語る者<sup>(136)</sup>、邪〔見〕を語る者、不信者、忘恩者

(131) Ch1: 塵勞自然等無差特故。Ch2: 不得垢法性故。Ch3: 以不見染法體故。

(132) Ch2: 貪著淨法故。Ch3: 以不見淨法體故。

(133) Ch1: 則無所趣。無所趣者則無爲。Ch2: 此中無法可得從一念至一念。若不從一念至一念即是諸法實相。諸法實相即是涅槃。Ch3: 而此法中無有一法可從一念至於一念轉至後世。以彼涅槃非轉法故。若無一法可從一念至於一念轉至後世即是一切諸法實相。諸法實相即是涅槃。Cf. SR: 「業の移行は微塵ほども得られないが、彼ら名声高き菩薩たちもまた自分たちの〔業の果報を〕知っているのである」 karmaṇo na ca saṃkrāntir aṇumātrāpi labhyate, te 'pi teṣāṃ vijānanti bodhisattvā mahāyaśāḥ. (ch.32 v.211). ŚS: 「その場合いかなる法もこの世からあの世へ移行しない。しかし、因と縁とは欠けてはいないので業と〔その〕果報のそれぞれの観念は存在する」 tatra na kaścīd dharmo 'smāl lokāt paralokaṃ saṃkrāmati, asti ca karmaphalaprati vijñaptir hetupratyayānām avaikalyāt. (sec.36; Pp 568.4-5)

(134) BCNPPH: mtshan nyid kyis. DHKLT: tshul gyis. Ch1: 速得相故。Ch2: 不得相故。Ch3: 以不得相故。

(135) Cf. Gv: 「無限の世界におけることば・概念設定・通念の種々性を見て……」 anantalokadhātuvyavahāraprajñaptisaṃvṛtivismātratām sampaśyan ....(90.15)

(136) Ch3: 或自説言我是説無業者、或自説言我是説無業作者。

(\*akṛtajña), 境界を設ける者<sup>(137)</sup>, 吐いたものを食べる者<sup>(138)</sup>, 許可を与えない者<sup>(139)</sup>であると認めるが, [そのような] 如来は, 語ったこれらのことに関して, [伝承として] 伝えられたわけでもなく, [事実として] 知られるわけでもない<sup>(140)</sup>.

それを使うことによって人々が増上慢を捨てるようになる, そういう意図に基づくことばを, 如来は説く. それが如来の意図に基づく [P46a] ことばである. プラフマー神よ, そのようにして如来は意図に基づくことばで法を説く. その [の意図に基づくことば] について [どのように振る舞うか] 菩薩はその行動を巧みに判断しなければならない<sup>(141)</sup>. 彼 (菩薩) は, そのように究極的な境地に達する (mthar phyin pa, \*niṣṭhāgata) ことによってすべての説示に巧みになるであろう. 彼は, <人々に対して色身を示すときには仏陀は出現する>と信解するであろう. <法身として認められている<sup>(142)</sup> ときには如来は出現しない>と信解するだろう. <文字を理解することを重視する<sup>(143)</sup> 人々に対しては如来は法を説く>と信解するだろう. <法性 (\*dharmatā) は不可説であると決定したのちは [如来は] 法を説くことはない>と信解するだろう. <顛倒から生じる煩惱は完全に滅しているのであるから般涅槃 (\*parinirvāṇa) は存在する>と信解するだろう. <不生の諸法は滅することがないのであるから涅槃は存在しない>と信解するだろう. <世俗 (\*saṃvṛti) に入っている点では衆生は存在する>と信解するだろう. <第一義 (\*paramārtha) を説く点では衆生は存在しない>と信解するだろう. プラフマー神よ, 以上のように, 如来は意図に基づくことばを示すことで, 法を説くのである. その場合, 菩薩は, あら

(137) Tib: mtshams gcod pa. Ch3 劫盜者. *Mvy* 6825: sīmābandhaḥ, mtshams bcad pa. *BHSD*: sīmābandha (p.596). *Divy* 第12章において, 「如来が必ずしなければならない10の仕事 (daśāvaśyakaraṇīyāni)」の第5に「[善悪の] 境界線を引く. sīmābandhaḥ kṛto bhavati. (93.9)」とある.

(138) Tib: skyugs pa za ba. Ch2: 食吐者. Cf. *Bodhis*: 「吐いたものを食べる生活をしている人々のために, 菩薩が飲み物や食べ物を, 飲んで吐き, 食べて吐くことは, 菩薩にとって内的なものと外的なものの混交した布施である, と言われる」yat punar bodhisattvo vāṃtāśijīvināṃ sattvānām arthe bhuktvā bhuktvā annapānaṃ vamatī, tat saṃsṛṣṭam ādhyātmikabāhyavastudānaṃ bodhisattvasyety ucyate. (114 25-115.1)

(139) Tib: go skabs mi phyed pa. Ch2, 3: 不受者. Cf. *VKN*: 「普通の人間が許可も得ないで菩薩に近づき [何かを] 強要することは出来ません」na śaktir asti prākṛtasya janasya bodhisatvenānavakāśakṛtasyopasaṃkramitum yācituṃ vā (Tib: go skabs ma phye bar byang chub sems dpa'i thad du 'gro ba'am bslang par mi nus so) . (ch.5 sec.20)

(140) Tib: mi 'byung mi snang ngo. Ch2,3: 如来無有如此諸事. *Mvy* 6403: na prajñāyate, mi snang ba. *Mvy* 6706: nāmnāyate, mi 'byung ba. *AD*: ā√mnā, to hand down traditionally or in sacred texts.

(141) Tib: de la byang chub sems dpaṣ spyod pa la mkhas par blo dpyad par bya'o. Ch1: 菩薩於彼則當曉了斯方便行. Ch2: 若菩薩善通達如来隨宜說者. Ch3: 若菩薩知如来隨行方便說者. Cf. *LV*: apratihatabuddhi (Tib: blo dpyad thogs pa med pa). (8.5)

(142) Tib: chos kyi skus rab tu phye ba. Cf. *Śikṣ*: dharmakāyaprabhāvita (Tib: chos kyi skus rab tu phye ba). (89.11) *BHSD*: prabhāvita, recognized (p.277 dharmakāya の項).

(143) Tib: yi ge rnam par rig pa lhur byed pa. Ch1: 敬文字. Ch2, 3: 喜樂文字. Cf. *VKN*: 「給仕されることを重視する人々を [見て]」upasthānagurūn satvān (Tib: rim gro lhur byed sems can rnams). (ch.7 v.38a)

ゆる説示に対して怖れることがない。

(VII-4)

その〔如来五力の〕うち、ブラフマー神よ、(3) 如来はどのような方便によって人々に法を説くのかといえば、＜布施によって財産を得る。持戒によって天界に生まれる。忍辱によって端正な身体を得る。精進によって知を得る。禅定によって遠離(\*viveka)を得る。智慧によって煩惱を放棄する〔ことを得る<sup>(144)</sup>〕。〔多〕聞によって智慧を得る。十善業道によって人間〔の世界〕と神〔の世界における〕様々な完成(\*sampad)を得る。慈・悲・喜・捨によってブラフマー神の世界に生まれることを得る<sup>(145)</sup>。止によって[P46b] 観を得る。学地によって無学地を得る。独覚地によって布施を浄化する<sup>(146)</sup>。仏地によって無量の知を得る<sup>(147)</sup>。そして、涅槃によってあらゆる苦を鎮めることを得るであろう＞というふうに、ブラフマー神よ、私は方便によって、人々がこの法を信解するようにする。

如来は、自我(\*ātman)であろうと、有情(\*sattva)であろうと、生命体(\*jīva)であろうと、人格主体(\*puṅgalā)であろうと、認識の対象とはしない(mi dmigs, \*nopalabhate)。如来は布施を対象とはしない。布施の果を対象とはしない。物惜しみを対象とはしない。物惜しみの果を対象とはしない。持戒を対象とはしない。持戒の果を対象とはしない。破戒(\*duḥśīla)を対象とはしない。破戒の果を対象とはしない。忍辱を対象とはしない。忍辱の果を対象とはしない。怒り(\*vyāpāda)を対象とはしない。怒りの果を対象とはしない。精進を対象とはしない。精進の果を対象とはしない。懈怠(\*kausīdya)を対象とはしない。懈怠の果を対象とはしない。禅定を対象とはしない。禅定の果を対象とはしない。散乱心(\*vikṣepa)を対象とはしない。散乱心の果を対象とはしない。智慧を対象とはしない。智慧の果を対象とはしない。劣慧(\*dausprajña)を対象とはしない。劣慧の果を対象とはしない。楽を対象とはしない。苦を対象とはしない。預流果を対象とはしない。乃至、悟り(菩提)を対象とはしない。般涅槃(\*parinirvāṇa)も認識の対象とはしない。

ブラフマー神よ、それらの衆生たちはそのような教説によって、修行(\*prayoga)し、励み、努力するが、修行し、励み、努力するそれらの法を理解することなく得ることがない、すなわち(gang 'di, \*yad idam)、預流果から阿羅漢果[P47a]まで、独覚や無上正等覚から涅槃までを理解することなく得ることがない[、そういう]ことがどうしてあろうか。

(144) DHNのみ `thob pa をもつ。Ch1: 學智慧者滅除塵勞愛欲之著。Ch2: 智慧得捨諸煩惱。Ch3: 智慧捨諸煩惱故。

(145) Cf. RĀ:「さらに「〔四〕禪」「〔四〕無量」「〔四〕無色」(=十二門)〔の修定〕によって、ブラフマー神をはじめとする〔諸神の領域の〕安穩を得る」dhyānāpramāṇārūpyais tu brahmādyam sukham aśnute.(ch.1, v.24ab). VKN:「四無量心を境涯としながらブラフマー神の領域に生まれるという結果に至る境涯にはないこと、それが菩薩の境涯である」yac caturapramāṇagocaraś ca na ca brahmalokopapattisparśanagocaraḥ, ayam bodhisatvasya gocaraḥ. (ch.4, sec.20). なお、「四禪・四無量心・四無色定」を北伝仏教は「十二門」とするが、これについては五島[2005]参照。

(146) KLNPhT: yongs su sbyong ba. H: yongs su sbyang ba. CD: yongs su spyad pa. P: yongs su spyod pa. B: yongs su sbyor ba. Ch: 緣覺之清淨。Ch2: 辟支佛地得消諸供養故。Ch3: 辟支佛地清淨消諸供養故。五島[2009]註 146 (174-175 頁) 参照。

(147) CDHNP: `thob pa. BKLPPhT: mthong ba. Ch1: 佛之道地所示現慧無有邊際。Ch2: 佛地得無量智慧故 Ch3: 佛地示無量智故。

ブラフマー神よ、これが、如来の方便による説法である。人々に正しい法を受け取らせるために、菩薩は方便に巧みなること (\*upāyakausalāya) を修行・行使 (sbyor ba, \*prayoga) しなければならない。

## (VII-5)

ブラフマー神よ、その〔如来五力の〕うち、(4) 如来の道理の教示 (tshul bstan, \*nāyadeśanā) とは何かといえば、眼が解脱への道理である。同様に、耳・鼻・舌・身・意が解脱への道理である。それはなぜかと言えば、眼は我・我所という点で空であり、これがその自性なのである<sup>(148)</sup>。同様に、意に至るまで、我・我所という点で空であり、これがその自性なのである。

ブラフマー神よ、欺く (slu ba, \*vañcana) ことがないので、すべての認識の場 (\*āyatana) は人々 (\*sattva) の解脱の道理であると知るべきである。これは、人々の解脱に向かって働き (brtson pa), 欺くことがない。色・声・香・味・触・法も同様である。これがあらゆる法の道理である。すなわち、空性の道理、無相の道理、無願の道理、無作 (\*anabhisamkāra) の道理、不生の道理、不滅の道理、不去不来の道理、不死不生の道理、自性清浄の道理、遠離の道理である。〔文字というものは〕自性として不活性 (bems po, \*mūrkhā) であって相互に結びつく (phrad, \*saṃyoga) ことはないので、如来はあらゆる文字を通して解脱の門 (\*vimuktidvāra) という道理を語る。

ブラフマー神よ、あらゆる文字を、真実を語るもの (\*satyakathā) と見るべきである<sup>(149)</sup>。あらゆる話 (\*kathā) は、如来の解脱への道理、真実を説くものとして、説かれたのである。およそ、如来の説法たるもので、煩惱によって汚されるようなものはまったく存在しない。説法たるものはすべて、解脱へと導き、涅槃を示すのである。

(148) Tib: de'i rang bzhin 'di yin no. Ch1: 悉本淨. Ch2: 性自爾. Ch3: 自性爾. このことばは「ものの本性 (prakṛti) としてそうになっている」ということを示している。たとえば、Bc 第3章において、シッダールタ王子が初めて老人を目撃したときに、

これは(姿をわざと)変化させたものなのか、もともとそういうものなのか、あるいは偶然なのか。

kiṃ vikriyaiṣā prakṛtir yadṛcchā // (ch.3 v.28d)

爲是身卒變 爲受性自爾 (Taisho vol.2 5c26)

とあり、第9章においても、来世の解脱の有無に関して、

〔ある人々は、火には熱性があり水には流動性があるが〕それと同じように、〔来世の人間の〕活動には、もともとそういうもの(自然の力)〔が備わっている〕、と主張する。

tadvat pravṛttau prakṛtiṃ vadanti // (ch.9 v.57d)

後世亦復然 此則性自爾 (Taisho vol.2 18a25)

同様の論法は、『雜阿含經』(第232經):「佛告三彌離提眼空。常恒不變易法空我所空。所以者何。此性自爾。若色眼識眼觸、眼觸因緣生受、若苦若樂不苦不樂。彼亦空常恒不變易法空我所空。所以者何。此性自爾。耳鼻舌身意亦復如是。是名空世間」(Taisho vol.2 56b24-29), 『大般涅槃經』:「如地堅性火熱性水濕性風動性而地堅性乃至風動性, 非因緣作, 其性自爾」(Taisho vol.12 793b24-25), 『大智度論』:「眼空無我無我所。何以故。性自爾。耳鼻舌身意色乃至法等亦復如是」(Taisho vol.25 292b4-6) などにも見られる。

(149) KLT: bltas te. BP: blta ste. CDHNPh: lta ste. Ch: 當觀. Ch2, 3: 當知。

ブラフマー神よ, [P47b] これが如来の道理の教示である。それを菩薩は学習すべきである。

(VIII-1)

ブラフマー神よ, その〔如来五力の〕うち, (5) 如来はどのような悲心 (\*karuṇā) によって人々に法を説くのかといえば, <sup>(150)</sup>… 人々に対して, 如来の大悲 (\*mahākaruṇā) は, 3 2 のすがたをもって, 生じる. <sup>(150)</sup> 3 2 とはどのようなものかといえば <sup>(151)</sup>, (1) 一切法には自我 (\*ātman) などないのに, 人々は自我がないことを信解しない. それゆえ, 人々に対して, 如来の大悲が生じる. <sup>(152)</sup> (2) 一切法には有情 (\*sattva) などないのに, 人々は有情のことを口にする (smra ba). それゆえ, 人々に対して, 如来の大悲が生じる. <sup>(153)</sup> (3) 一切法には生命体 (\*jīva) などないのに, 人々は生命体のことを口にする. それゆえ, 人々に対して, 如来の大悲が生じる. <sup>(154)</sup> (4) 一切法には人格主体 (\*pudgala) などないのに, 人々は人格主体に執着する (\*sthita). それゆえ, 人々に対して, 如来の大悲が生じる. <sup>(155)</sup> (5) 一切法には自性 (ngo bo nyid, \*svabhāva) などないのに, 人々は自性 (ngo bo, \*bhāva) を見る. それゆえ, 人々に対して, 如来の大悲が生じる. <sup>(156)</sup> (6) 一切法には住居 [に相当するもの] (\*niketa) などない<sup>(157)</sup>のに, 人々は住居 [に相当するもの] に依拠する. それゆえ, 人々に対して, 如来の大悲が生じる. <sup>(158)</sup> (7) 一切法には帰すべき拠り所 (\*ālaya) などないのに, 人々は帰すべき拠り所を喜ぶ. それゆえ, 人々に対して, 如来の大悲が生じる. <sup>(159)</sup> (8) 一切法には我に属する (\*mama) とするものなどないのに, 人々は我に属するものへの執着に住する. それゆえ, 人々に対して, 如来の大悲が生じる. <sup>(160)</sup> (9) 一切法には [それらを] 支配する者 (bdag po, \*svāmika) などないのに, 人々は所有しようと努力する. それゆえ, 人々に対して, [P48a] 如

<sup>(150)</sup> [引用] 『大智度論』

[Ch]: 又如持心經中說. 大慈大悲有三十二種. (Taisho vol.25 257b2-3)

<sup>(151)</sup> *Mvy* 154: dvātriṃśat tathāgatasya mahākaruṇāḥ. なお, 以下に挙げる 32 種の大悲は, *Mvy*155-186 と同じと言っていいだろう.

<sup>(152)</sup> *Mvy* 155(1): nairātmyāḥ sarvadharmāḥ sattvāś ca nairātmyaṃ nādhimucyante, atas tathāgatasya sat-tveṣu mahākaruṇōtpadyate.

<sup>(153)</sup> *Mvy* 156(2): niḥsattvāḥ sarvadharmāḥ sattvāś cādi.

<sup>(154)</sup> *Mvy* 157(3): nirjīvāḥ sarvadharmāḥ ....

<sup>(155)</sup> *Mvy* 158(4): niḥpudgalāḥ sarvadharmāḥ ....

<sup>(156)</sup> *Mvy* 159(5): a(sva)bhāvāḥ sarvadharmāḥ .... (Tib:chos thams cad ni rang bzhin med pa ....)

<sup>(157)</sup> Tib: gnas med pa yin. Ch1: 都無所依. Ch2, 3: 無住. Cf. *Gv*: 「あらゆる拠り所や住居に依拠することなく [同時に] あらゆる生存形態の拠り所や住居に遊行する (菩薩たちの) 行を ……」 (bodhisattvānām ....) sarvālayaniketānīśritānām sarvabhavālayaniketacāriṇām caryām .... (142.4)

<sup>(158)</sup> *Mvy* 160(6): aniketāḥ sarvadharmāḥ .... (Tib: chos thams cad ni gnas med pa ....)

<sup>(159)</sup> *Mvy* 161(7): anālayāḥ sarvadharmāḥ ....

<sup>(160)</sup> *Mvy* 162(8): amamāḥ sarvadharmāḥ ....

来の大悲が生じる。<sup>(161)</sup> (10) 一切法には実体 (dngos po, \*vastu) などないのに、人々は実体に依拠する。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(162)</sup> (11) 一切法には生起することなどないのに、人々は生起することに執着する (\*sthita)。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(163)</sup> (12) 一切法には消え去ること、現れることなどないのに、人々は死と生に執着する。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(164)</sup>

## (VIII-2)

(13) 一切法は汚される (\*saṃkliṣṭa) ことなどないのに、人々は煩惱に汚される。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(165)</sup> (14) 一切法は貪りを離れているのに、人々は貪欲である。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(166)</sup> (15) 一切法は怒りを離れているのに、人々は怒りを抱く。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(167)</sup> (16) 一切法は愚かさを離れているのに、人々は愚かである。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(168)</sup> (17) 一切法は不来 (\*anāgatika) であるのに、人々は来に住する。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(169)</sup> (18) 一切法は不去 (\*agatika) であるのに、人々は去に住する。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(170)</sup> (19) 一切法は無作為 (\*anabhisamkāra) であるのに、人々は作為を行おうとする。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(171)</sup> (20) 一切法は無戲論であるのに、人々は戲論を喜んでいる。[P48ab] それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(172)</sup> (21) 一切法は空に他ならない<sup>(173)</sup>のに、人々は邪見に落ち込んでいる。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(174)</sup> (22) 一切法は無相であるのに、人々は相を自らの行動領域 (\*gocara) としている。それゆえ、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(175)</sup> (23) 一切法は無願であるのに、人々は願いを実現しようとする。それゆえ、人々に対して、如来の大

(161) *Mvy* 163(9): asvāmikāḥ sarvadharmāḥ ....

(162) *Mvy* 164(10): avastukāḥ sarvadharmāḥ ....

(163) *Mvy* 165(11): ajātāḥ sarvadharmāḥ ....

(164) *Mvy* 166(12): acyutānutpannāḥ sarvadharmāḥ ....

(165) *Mvy* 167(13): asaṃkliṣṭāḥ sarvadharmāḥ ....

(166) *Mvy* 168(14): vigatarāgāḥ sarvadharmāḥ ....

(167) *Mvy* 169(15): vigatadveṣāḥ sarvadharmāḥ ....

(168) *Mvy* 170(16): vigatamohāḥ sarvadharmāḥ ....

(169) *Mvy* 171(17): anāgatikāḥ sarvadharmāḥ ....

(170) *Mvy* 172(18): agatikāḥ sarvadharmāḥ ....

(171) *Mvy* 173(19): anabhisamkārah sarvadharmāḥ ....

(172) *Mvy* 174(20): aprapañcāḥ sarvadharmāḥ ....

(173) Tib: stong pa nyid. Ch1: 一切諸法悉爲空靜. Ch2,3: 一切法空.

(174) *Mvy* 175(21): śūnyāḥ sarvadharmāḥ ....

(175) *Mvy* 176(22): animittāḥ sarvadharmāḥ ....

悲が生じる。<sup>(176)</sup>

(VIII-3)

(24) ああ、世間に住するこれ〔らの人々〕は互いに鬪争することにとらわれて、怒りによる恨みをいつまで忘れないという欠点 (\*vyāpādakhiladoṣa) に落ち込んでいるのを見て、怒りによる恨みの欠点を捨てさせるために彼らに教えを説こうと〔考え〕、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(177)</sup> (25) ああ、世間に住するこれ〔らの人々〕は顛倒〔した考え〕をもち、恐ろしい道に入り、間違った道にいる。彼らを正しい道に導こうと考えて、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(178)</sup> (26) ああ、世間に住するこれ〔らの人々〕は欲深く、貪り〔の心〕に圧倒されて〔いつまでも〕満足することなく、他人の財産を盗む。彼らを、信・戒・聞・布施・智慧・慚・愧という聖なる財産 (七聖財) に住せしめようと考えて、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(179)</sup> (27) ああ、これらの人々は財産・穀物・家屋・息子・妻への渴愛 (sred pa, \*trṣṇā) ゆえに奴隷となつて、堅実でないものを堅実だと思ひこんでいる。彼らに対して、はっきりと無常であることを説き示そうと考えて、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(180)</sup> (28) ああ、これらの人々は間違った生活をして、おたがいに欺き合うことばかりしている。[P49a] 彼らが清浄な生活をするように教えを説こうと考えて、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(181)</sup> (29) ああ、これらの人々は好まれてはいない<sup>(182)</sup>のに、利得や尊敬によって思い上がり<sup>(183)</sup>自分たちは友人であると考えている。苦を鎮める涅槃という幸福に関して、彼らにとっての、ほんとうに正しい善き友 (\*kalyāṇamitra) になろうと考えて、人々に対して、如来の大悲が生じる。<sup>(184)</sup> (30) ああ、これらの人々はひどく煩惱に汚されており、苦のあり方 (苦法) の多い在家〔の生活〕を喜んでいる。彼らを三界から超出させるために出離の法を説こう、と考えて、人々に対して如来には大

<sup>(176)</sup> *Mvy* 177(23): apraṇihitāḥ sarvadharmāḥ ....

<sup>(177)</sup> *Mvy* 178(24): anyonyavivādasamgrhīto vatāyaṃ lokasaṃniveśo vyapādakhiladveṣapratipanna iti saṃpaśyan ....

<sup>(178)</sup> *Mvy* 179(25): viparyāsasamprayukto vatāyaṃ lokasaṃniveśo viṣamamārgaprayātāpāpāta-utpatha-mārgasthāyi .... Ch3 は (25) で類似の句を重ねる。Ch3: 一切世間邪見顛倒行於邪道。爲欲令其住正道故如來於此諸衆生等而起大悲。一切世間墮於顛倒墮於險難住於非道。爲欲令其入實道故如來於此諸衆生等而起大悲。

<sup>(179)</sup> *Mvy* 180(26): lubdho lobhābhībhūto vatāyaṃ lokasaṃniveśo 'trṣṭāḥ paravittāpahārī ....

<sup>(180)</sup> *Mvy* 181(27): dhanadhānyagrhaputrabhāryātrṣṇādāsā vateme sattvā asāre sārasaṃjñīnaḥ ....

<sup>(181)</sup> *Mvy* 182(28): viṣamājīvā vateme sattvā anyonyaparivañcanopasthitāḥ .... Ch1, 2 は (28) と (29) の順が逆転している。

<sup>(182)</sup> Tib: mi mdza' ba (\*apriya). Ch1: 則爲仇怨。Ch2, 3: 身爲怨賊。 *Mvy* 183(29): atrṣṭā(h), chog mi shes pa.

<sup>(183)</sup> KL: khe dang bkur bstis rgyags. PhT: khe dang bkur stis rgyags. B: khe dang bkur stir rgyag. DHKNP: khe dang bkur stir rgyas. Ch1: 求財利業。Ch2: 貪著養育。Ch3: 貪著供養恭敬名稱讚歎。 *Mvy* 183(29): rnyed pa dang bkur sti dang tshigs su bcad pa la spyod kyang .

<sup>(184)</sup> *Mvy* 183(29): atrṣṭā vateme sattvā lābhasatkāraślokapaciritās trṣṭāḥ sma iti pratijānante .... (ああ、これらの人々は、足ることを知らず、利得・尊敬・称賛を受けて「自分は満足している」と自認する。)

悲が生じる。(185) (31) (186)... 一切の法は、原因によって現れて見せかけだけの姿を示しているにすぎないという特質をもっている…(186)。〔人々は〕かの聖なる解脱に関して努力を怠っている (le lo byed, \*kusīda) と考えて、人々に対して、如来の大悲が生じる。(187) (32) 人々は、きわめてすぐれた無執着の仏知たるこの聖なる完全な涅槃を捨てて、声聞・独覚乗すなわち小乗を求めている。彼らが仏知に依る (dmigs) ようにするために、広大なもの (大乘) に対して心が向かうようにしよう、と考えると、人々に対して如来には大悲が生じる。(188)

## (VIII-4)

ブラフマー神よ、人々に対して如来には〔このような〕32のすがたからなる悲心が生じるのである。それゆえ、如来は大悲に住すると言われるのである。

(189... ブラフマー神よ、ある菩薩が、この32のすがたからなる大悲を持って、人々のなかに入っていく…(189)のであれば、ブラフマー神よ、その菩薩摩訶薩は、偉大な威厳 (\*mahātejas) のある福田 [P49a] を完全に満たし、不退転であり、人々の利益のために励むものであると理解すべきである」

さて、「大悲の法門」というこの章 (\*parivarta) が説かれたとき、三万二千の生き物 (\*prāṇin) たちが無上正等覚にむけて心を起こした。(191... 八千の生き物たちが忍(190) を獲得した。七万二

(185) *Mvy* 184(30): nityābhiratā vateme sattvā ekāntakliṣṭā duḥkhabhājane gṛhāvāse .... Ch3 は Tib の (28) 前半と (30) 後半を (30) とする。Ch3: 一切世間衆生皆樂行欺誑業, 田宅等中邪命自活。以爲説法令行正命出三界故, 如来於此諸衆生等而起大悲。

(186) Tib: chos thams cad ni rgyus nye bar 'gro ba rnam par bsgrubs pas nye bar gnas pa'i mtshan nyid de. Ch1: 處於所作一切諸法, 因貪起住衆緣所處諸立之相。Ch2: 一切諸法從因緣有。Ch3: 一切諸法皆從因緣, 勤修諸行乃得成就。 *Mvy*7233: viṭhapanapratyupasthānalakṣaṇa. *BHSD*: pratyupasthāna (p.378), viṭhapanā (p.486). Cf. *Adsp*: 「なぜなら、アーナンダよ、虚空が不活性であるように、一切法は、不活性であり把握できないものである。アーナンダよ、一切法は幻術で作りに出された人のようである。アーナンダよ、心がないゆえに、また、堅実ならざるものによって見せかけだけの姿を示しているにすぎないゆえに、一切法は、知られることはないのである」 nirīhakā agrāhyā hy ānanda sarvadharmā āka(kā)śanirīhakatayā, acintyā hy ānanda sarvadharmāḥ māyāpuruṣopamāḥ, avedakā hy ānanda sarvadharmās cittavigatavāt, viṭhapanapratyupasthānalakṣaṇatvād asāraikatām copādāya. (81.22-26)

(187) *Mvy* 185(31): kāraṇopagāḥ punaḥ sarvadharmā nidhāpana(viṭhāpana-, viṣṭhāpana-)pratyupasthānalakṣaṇāḥ ....

(188) *Mvy* 186(32): idam punar agram asaṅgajñānam utsrjya viśiṣṭaparinirvāṇatām(-nārtham) sattvā hīnayānaṃ prārthayante yad idam śrāvakaṃpratyekabuddhayānaṃ tebhya uttaramatiṃ rocayisyāmīti yad idam buddhajñānādhyāmbanātāyai iti tathāgatasya sattveṣu mahākaruṇo[t]padyate.

(189) [引用] 『大智度論』

[Ch]: 又如明網菩薩經中說。菩薩處衆生中行三十二種悲。(Taisho vol.25 211b19-20)

(190) 次註にあるように漢訳はすべてこの「忍」を「無生法忍 (anutpattikadharmakṣānti)」としているが、少なくとも Tib では、前後の文脈や他經典における定型表現から見て「三忍 (音響忍 ghoṣānuga-kṣānti, 隨順忍 anulomika-dh.k., 無生法忍 anutpattika-dh.k.)」の中の「音響忍」や「隨順忍」である可能性も捨てきれない。なお、同じ BP に、「この

千の天子 (\*devaputra) たちには、塵が無く汚れを離れた清浄な法眼 [が生じた]。…<sup>(191)</sup>

(IX-1)

その時、ジャーリニープラバ菩薩は、世尊に対して次のように申し上げた。「世尊よ、ブラフマー神であるこのヴィシェーシャチンティンは、この如来の大悲に関する説法を聞いても、歡喜することもなく感激することはありません」

ヴィシェーシャチンティン (V) が言う。「良家の子よ、ある人の知 (\*vijñāna) が二つ [の対立するもの] に分かれている場合、その人たちには歡喜したり感激したりすることがあるでしょうが、二 [つの対立するものの] のない真実の究極 (\*bhūtakoti) に住している場合には、歡喜することもなく感激することはありません。

<sup>(192)</sup>… 良家の子よ、たとえば、幻術によって作り出された (\*māyānirmita) 人は、踊りを踊るという幻のただなかにあっても、歡喜することもなく感激することはありません。良家の子よ、それと同じように、一切の法は幻の相を自性としてもっているのです、如来の神変 (\*prātihārya) に対して喜びが生じることもなければ感激することはありません。…<sup>(192)</sup> 良家の子よ、たとえば、如来によって化作された人が如来の巧みな説法 (\*pratibhāna) を聞いても、歡喜することもなく感激することはありません。良家の子よ、それと同じように、諸法は幻として作られた (\*mirmita) という自性をもつということがわかれば、如来に対して強い歡喜が生じることもなければ、他の人々に対して劣っていると考えることもないのです」

(IX-2)

ジャーリニープラバ (J) 菩薩が言う。「ブラフマー神よ、あなたは一切の法は自性として幻術によって作り出されたものだと知っていますか」

[V が] 言う。[P50a] 「良家の子よ、二つの相に依拠して (\*vyavasthita) 行動する人たちに尋ねてください」。

[J が] 言う。「ブラフマー神よ、あなたはどのようなところで行動しますか」

[V が] 言う。「すべての愚かな凡夫 (\*prthagjana) たちが行動するところで、私も行動します」

[J が] 言う。「ブラフマー神よ、凡夫たちは貪り・怒り・愚かさにおいて行動します。〔彼らは〕有身見、戒禁取、疑惑、我への執着、我所への執着、欲望、大欲望 ('dod chen) [などの] 間違った行動<sup>(193)</sup> において行動していますが、あなたもそれらにおいて行動するのですか」

[V が] 言う「良家の子よ、あなたは、凡夫たちがもっている凡夫のあり方 (凡夫法) を完全に体得し (\*pariniṣpanna) たいのですか」

[J が] 言う。「私は、凡夫そのものにさえ [成りたいとは] 欲していないのに、どうして、これらのあり方 (法) を完全に体得したいと望んだりしましょうか」

[V が] 言う。「良家の子よ、およそ法というものは無完成なものですが、そういう法におい

教説が説かれたとき、4万4千の菩薩には随順忍が生じた」(P 57a7-8) とある。Cf. SR 7.7-14.

<sup>(191)</sup> Ch1: 三萬二千菩薩得不起法忍。Ch2: 八千菩薩得無生法忍。Ch3: 八千菩薩得無生法忍。七萬二千天子得離垢法眼。

<sup>(192)</sup> Ch3 はこの部分を欠く。

<sup>(193)</sup> Tib: log par sbyor ba. Ch2,3: 邪道。

て、あなたは、貪り・怒り・愚かさをもつものになりたいのでしょうか」

〔J が〕 言う。「そんなことはありません」

〔V が〕 言う。「良家の子よ、一切法は、貪りを離れ、怒りを離れ、愚かさを離れていますが、行動（行）もまたそれと同じ特徴（相）をもっています。良家の子よ、そのように行は不二（\*advaya）ですから、凡夫の行こそが聖人たちの行なのです。良家の子よ、一切の行は非行なのです。一切の説（\*prajñapti）は非説なのです。一切の道（\*gati）は非道なのです」

（IX-3）

〔J が〕 言う。「ブラフマー神よ、どのような場合に、一切の行は非行のですか」

〔V が〕 言う。「八千・コーティ・ナユタの劫のあいだ行じたとしても、法界には減ることも満ちることも見られません（mi dmigs）。それゆえ、あらゆる行は非行なのです」

〔J が〕 言う。「ブラフマー神よ、どのような場合に、一切の説は非説のですか」

〔V が〕 言う。「良家の子よ、<sup>(194)</sup>…一切の法は非説（言葉で表示できないもの）であるから、比喩的に表現される（\*upacāra）のです。…<sup>(194)</sup>それゆえ、一切の法についての説は非説なのです」 [P50b]

〔J が〕 言う。「どのような場合に、一切の道は非道のですか」

〔V が〕 言う。「どこにも行くこと（\*gati）がないので、一切の道（\*gati）は非道（\*agati）なのです」

その時、世尊は、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンに、「ブラフマー神よ、その通りだ。その通りだ。もし、説かなければならないのであれば、そのように説くべきなのだ」と称賛した（\*sādhukāram adāt）。

（X-1）

その時、法王子（\*kumārabhūta）<sup>(195)</sup>であるジャーリニープラバは、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンに次のように言った。「ブラフマー神よ、あなたは、先程、『すべての愚かな凡夫が行動するところで、私は行動します』と言いましたが、まさにその行動（行）を得ているのです」

〔V が〕 言う。「良家の子よ、もし、私に生の原因というものが存在するのであれば、私は行を得ることでしょう」

〔J が〕 言う。「ブラフマー神よ、もし不生であるなら、どのようにして人々を成熟させるのですか」

〔V が〕 言う。「良家の子よ、如来によって化作される生のように、私の生もまたそれと同じです」

〔J が〕 言う。「如来によって化作されたものには、いかなる生も存在しません」

〔V が〕 言う。「如来によって化作されたものは見えますか」

〔J が〕 言う。「雄牛（\*ṛṣabha）の如き仏陀〔の力〕ゆえに見えます」

〔V が〕 言う。「良家の子よ、雄牛の如き業〔の力〕ゆえに私の生もまたそのようだと見るべ

(194) Ch1: 一切諸法如来所教如来所處。Ch2: 如来以不説相説一切法。Ch3: 如来以不可説相説一切法。

(195) 「童真」の方が kumārabhūta の原義に近いが、今は「法王子」としておく。平川 [1995] 参照。

きです」

〔Jが〕言う。「ブラフマー神よ、業を作る (\*karmābhisaṃskāra) ことにおいて行じるのですか」

〔Vが〕言う。「良家の子よ、私は業を作ることにおいて行じたりはしません」

〔Jが〕言う。「業は存在しないのに、どうして業が雄牛のよう〔だと言える〕のでしょうか」

〔Vが〕言う。「業がそうであるように、その雄牛のごとき〔力〕もまた真如を超えているわけではありません」

(X-2)

<sup>(196)</sup>… その時、長老シャーリプトラは、世尊に次のように申し上げた。

「世尊よ、これらの象〔のごとき方々の〕の意図に基づくことばに入る人々は、多くの福德を生じるでしょう。なぜかと言えば、世尊よ、それらの正しい人々 (\*satpuruṣa) の名前を聞くことだけでも、聞いて素晴らしいこと [P51a] なのですから、ましてや、〔その〕説法〔を聞くこと〕は言うまでもありません。世尊よ、たとえば、樹木が大地に依拠することなく根・茎・枝・葉・花・果実を示すことがあったとしましょう。世尊よ、これらの正しい人々の行のすがた (\*lakṣaṇa) も、ちょうどそのようであると見るべきです。つまり、一切法に依拠することなく、行じたり、生まれたり、現れたり、消えたり、死んだりすることを示すのであって、さまざまな仏国土におられるこれらの人々に、このような優れた智慧の弁才が〔靈感として〕現れる (\*pratibhāti) ことでしょう。世尊よ、このような智慧の弁才による自在力 (\*vikurvaṇa) を見れば、良家の子であれ、良家の娘であれ、誰がいったい、無上正等覚に向かって心を起こさないことがありましようか」…<sup>(196)</sup>

<一次文献・略号> (校訂テキストまたは西藏大蔵経, 大正大蔵経)

- Adsp*            *The Gilgit Manuscript of the Aṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitā*, Chapters 55 to 70, Corresponding to the 5th Abhisamaya, edited and translated by Edward Conze, Serie Orientale Roma 26, Roma, 1962.
- AVP*             *Avalokītavratā's Prajñāpradīpatīkā*, Tib: Shes rab sgron ma rgya cher 'grel pa, Otani No.5259 (dBu-ma Wa 1a1- Za 405b7 ), Tohoku No.3859.
- Bc*                *Buddhacarita : Or, Acts of the Buddha, Complete Sanskrit Text with English Translation*, by E. H. Johnston, Labore, 1936; reprint Delhi,1972. Ch: 『佛所

<sup>(196)</sup> [引用] 『大智度論』

〔Ch〕: 如明網經中説.

慧命舍利弗白佛言。「世尊, 是諸菩薩所説若能解者大得功德. 何以故, 是諸菩薩乃至得聞其名字得大利益. 何況聞其所説. 世尊, 譬如人種樹不依於地而欲得其根莖枝葉成其果實是難可. 諸菩薩行相亦如是. 不住一切法而現住生死, 在諸佛世界於中自恣樂説智慧法. 誰有聞是大智慧遊戲自恣樂説法, 而不發阿耨多羅三藐三菩提意者. (Taisho vol.25 267b16-24)

\*この引用は、次の第3巻冒頭部分まで続く。

- 行讚』 Taisho No.192.
- Bcvp* *Bodhicaryāvatāra Pañjikā: Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, edited by P. L. Vaidya, BST No.12, Darbhanga, 1960.
- Bhk* *Bhāvanākrama: Minor Buddhist Texts Part III Third Bhāvanākrama*, Giuseppe Tucci(ed.). Serie Orientale Roma XLIII, Roma, 1971.
- Bodhis* *Bodhisattvabhūmi*, U. Wogihara (ed.), Tokyo, 1930-36.
- BP* *Brahmaviśeṣacintipariṣcchā*.
- Dbh* *Daśabhūmikasūtra*, edited by P. L. Vaidya, BST No.7, Darbhanga, 1967.
- Divy* *Divyāvadāna*, edited by P. L. Vaidya, BST No.20, Darbhanga, 1959.
- Gv* *Gaṇḍavyūhasūtra*, edited by P. L. Vaidya, BST No.5, Darbhanga, 1960.
- KP* *Kāśyapaparivarta*, A. von Staël-Holstein (ed.), Shanghai, 1926; reprint, Tokyo, 1977. *The Kāśyapaparivarta Romanized Text and Facsimiles*, M.I. Vorobyova-Desyatovskaya (ed.), Tokyo, 2002.
- Krp* *Karuṇāpuṇḍarīka*, edited with Introduction and Notes by Isshi Yamada, Vol. II, London, 1968.
- Lañk* *Saddharmalañkāvatārasūtra*, edited by P. L. Vaidya, BST No.3, Darbhanga, 1963.
- LV* *Lalitavistara*, edited by P. L. Vaidya, BST No.1, Darbhanga, 1958.
- MMK* *Nāgārjuna's Mūlamadhyamakakārikā Prajñā Nāma*, edited by J.W. de Jong, 1977, Revized by Christian Lindtner, 2004.
- MSA* *Mahāyānasūtrālamkāra*, edited by Sylvain Lévi, Tome I, Texte, Paris, 1907.
- Mv* *Mahāvastu*, 3 vols., É.Senart (ed.), Paris, 1882,1890,1897.
- Pp* *Madhyamakavṛttiḥ, Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, par Louis de la Vallée Poussin, St.Pétersburg, 1913.
- Pra* *Prajñāpradīpa*, Tib: dBu ma'i rtsa ba' i 'grel pa shes rab sgron ma, Otani No.5253 (dBu-ma Tsha 53b3-352b6), Tohoku No.3853.Ch:『般若燈論釋』 Taisho No.1566.
- Pvsp* *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, (V), edited by T.Kimura, Tokyo, 1992.
- RĀ* *Nāgārjuna's Ratnāvalī, Vol.1 The Basic Texts (Sanskrit, Tibetan, Chinese)*, by Michael Hahn, Bonn, 1982.
- Śikṣ* *Śikṣāsamuccaya*, edited by P. L. Vaidya, BST No.11, Darbhanga, 1961.
- SP* *Saddharmapuṇḍarikasūtra*, Kern and Nanjio (eds.), St.Pétersburg, 1912.
- SR* *Samādhirājasūtra*, edited by P.L.Vaidya, BST No.2, Darbhanga, 1961.
- SN* *Samyutta-Nikāya*, 5 vols, PTS., 1884-1898.
- Sn* *Suttanipāta*, PTS., 1913.
- ŚS* *The Śālistamba Sūtra*, edited by N. Ross Reat, 1993, Delhi.
- SS* *Nāgārjuna's Sūtrasamuccaya : A Critical Edition of the mDo kun las btus pa*, Edited by Bhikkhu Pāsādika, 1989, Copenhagen.

- Su* *Suvikrāntavikrāmipariṣcchā Prajñāpāramitāsūtra*, by Hikata Ryusho, Fukuoka, 1958 ; reprint, 1983 (臨川書店).
- Sukh* *Sukhāvātīvyūha*, Atuuji Ashikaga (ed.), Kyoto, 1965.
- VKN* *Vimalakīrtinirdeśa, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.

<二次文献・略号> (辞書・索引類)

- AD* *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, by Prin. Vaman Shivaram Apte, Revized & Enlarged Edition, Kyoto, 1978 (臨川書店).
- BHSD* *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Volume II: Dictionary*, by Franklin Edgerton, New Haven, 1953; reprint Delhi, 1970.
- Mvy* *Mahāvīyūtpatti*: 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木學術財団, 1916.
- TCD* *A Tibetan-Chinese Dictionary*: 『藏漢大辭典』(上・下), 張怡蓀主編, 民族出版社, 1993.
- TD* 西藏佛教研究会『藏文辭典』, ゲシエー・チョエキタクパ著 民族出版社 1957年; 山喜房佛書林 1972年.
- TSD* *Tibetan Sanskrit Dictionary*, ed. by Lokesh Chandra, New delhi, 1959; reprint, 1982 (臨川書店).

<三次文献> (論文・著書)

- 榎本文雄 [2009]: 「『四聖諦』の原意とインド仏教における「聖」」『印度哲学仏教学』#24, (1)-(19)頁.
- 五島清隆 [1978]: 「法華經に見る方便思想」『東洋學術研究』#17-5, 112-137頁.
- [1986]: 「提婆達多伝承と大乘經典」『仏教史学研究』#28-2, 51-69頁.
- [1989]: 「『梵天所問経』解題」『堀内寛仁先生喜寿記念 密教文化論集』(非売品) 402-415頁.
- [1997]: 「『梵天所問経』(3)―此岸の肯定と説法への情熱―」『印度學佛教學研究』#46-1, (95)-(101)頁.
- [2003]: 「チベット訳テキスト校訂と写本大藏経—『思益梵天所問経』を中心に—」『印度學佛教學研究』#52-1, (53)-(57)頁.
- [2005]: 「仏典における「十二門」の用例と意義について—『十二門論』の書名との関連で—」『種智院大学研究紀要』#6, pp.55-71.
- [2009]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(1)」『インド学チベット学研究』#13, 141-184頁.
- 田賀龍彦 [1974]: 『授記思想の源流と展開』平楽寺書店.
- 平川 彰 [1995]: 「文殊師利法王子と一生補処」『印度哲学仏教学』#10, 1-20頁.

望月海慧 [2002]: *A Study of the Mahāsūtrasamuccaya of Dīpaṃkaraśrījñāna*, A Report of Grant-in-Aid for Encouragement of Young Scientist, Project Number 12710009.

## An Annotated Japanese Translation of the Tibetan Version of the *Brahmapariṣcchā*(2)

### Summary

The second volume (*bam po gnyis pa*) of the Tibetan version of the *Brahmapariṣcchā* begins with an analysis of worldly *dharma* (*lokadharmā*). *Lokadharmā* has two aspects, one pertaining to the state of the mundane world and its conventions, as can be seen in the eight *lokadharmas*, and the other relating to the true nature of the world. The latter generally refers to the first two of the four noble truths (i.e., the truths of suffering and the origination of suffering). The *Brahmapariṣcchā*, on the other hand, proposes a new set of four truths—world (*loka*), origination of the world (*lokasamudaya*), cessation of the world (*lokanirodha*), and path to the cessation of the world (*lokanirodhapratipad*)—on the grounds that if suffering is one of the truths, then the noble truth of suffering would also apply to animals and so on. (In this context “noble truth” [*āryasatya*] is rendered more or less consistently in the Tibetan version as “truth of [i.e., for] noble ones.”) The text further states that everything is nonexistent (*asat*) and that being and no-being, real and false cannot be found in something that is nonexistent. The Tathāgata takes it upon himself to expound by means of words a truth that is at variance with this type of worldly thinking and cannot be grasped by words, and those who understand it and convey it to others on behalf of the Tathāgata are bodhisattvas referred to as “righteous people” (*satpuruṣa*). The sūtra then goes on to extol their outstanding qualities.

The above corresponds to the first half of this volume. The main topic of the second half is the “five powers of the Tathāgata.” These five powers or faculties are preaching the Dharma (*dharma*), explaining with intentional language (*saṃdhābhāṣya*), using expedient means (*upāya*) to make people accept the Dharma, preaching in accordance with reason (*naya*), and acting in conformity with compassion (*karuṇā*). The Tathāgata preaches the Dharma in a great variety of ways out of a compassionate desire to save all beings, and when doing so he employs expedient means so that people will accept his teachings, sometimes convincing them by means of reason and at other times expounding teachings full of contradictions with intentional language. Having understood and mastered all this, the bodhisattva has to guide others.

These five powers of the Tathāgata give succinct expression to the philosophical standpoint of the *Brahmapariṣcchā*, and worth noting in particular are links with the *Saddharmapuṇḍarīka*. I am of the view that the *Brahmapariṣcchā* predates the *Saddharmapuṇḍarīka*,

and connections between the Tathāgata's five powers (especially *saṃdhābhāṣya*, *upāya* and *karuṇā*) and *saṃdhābhāṣya*, *tathāgata-upāyakauśalya* and *tathāgata-jñānadarśana* appearing in the *Saddharmapuṇḍarīka* are important in this regard. The relationship between these two sūtras is important for considering the history of the formation and thought of early Mahāyāna sūtras, and this is a subject that I hope to address in the future.

<キーワード> 世間法 (*lokadharmā*), 四聖諦 (*catur-āryasatya*), 非実在 (*asat*), 意図に基づくことば (*saṃdhābhāṣya*), 方便 (*upāya*), 大悲 (*karuṇā*)